

英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (XVIII)

個性と能力差に対応した複数指導 (担任) 制 (XII)

発表会要項

聖徳学園小学校
聖徳幼稚園

教育目標

- 1 一人ひとりの子どもの個性を育てる
- 2 知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる
- 3 豊かな感性と自立心を育てる

お誓い三か条

- 一、われわれは 未来をひらく戦士となり
新しい世界を 開拓します
- 一、われわれは 恥と涙をわきまえて
光明正大に 行動します
- 一、われわれは 祖国の伝統を重んじ
祖国と人類のために つくします

発表会要項

主 題 英才教育の追究

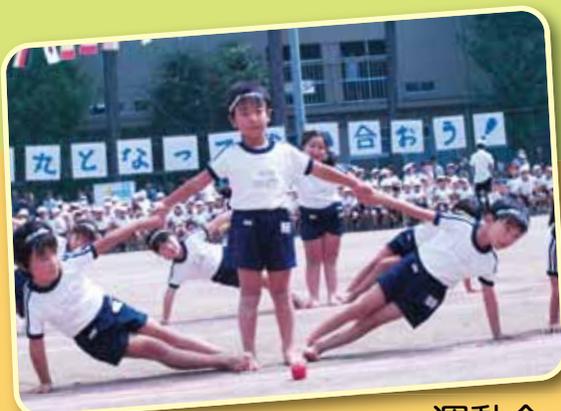
- 創造的知能の開発と育成 (XVIII)
- 個性と能力差に対応した複数指導 (担任) 制 (XII)

- 平成 24 年度東京都児童生徒発明くふう展
において 25 回目の「学校賞」受賞
- 平成 25 年度文部科学大臣から
「創意工夫育成功労学校賞」受賞

幼稚園



おすもうさんとあそぼう



運動会



自然体験教室



おゆうぎ会

兜制作



スキー学校

小学校



修学旅行



マラソン大会



スポーツ大会



林間学校



第 45 回 公開研究発表会に当たって

～知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育～

聖徳学園小学校長 加賀光悦
聖徳幼稚園長

「氷が溶けたら何になる？」という問いに対して、「水になる」という答えだけではなく、「春になる」と言った子どものような柔軟な発想を大切に育てていきたい、という願いで昭和 44 年（1969）に、個性の伸長と知能教育を基本にした英才教育を開始しました。以来 44 年間、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育」を目指して、

- 主体的に学ぶ態度、意欲と集中力の育成
- 知能開発～創造的知能の開発と育成～
- 一人ひとりの個性と能力に応じた指導～能力の限界への挑戦～

を重点にした教育活動を重ねてきました。

●意欲と集中力の育成で知能と学力の向上

我が国では最近、小学生から大学生に至るまで学力低下の問題が話題になっています。その原因として、子どもたち自身の学習意欲と集中力の低下が大きな要因ではないでしょうか。

知能や学力の向上はもとより、子どもたちが将来社会で活躍していく上でも重要な資質は意欲と集中力になるとの考えから、私たちは幼稚園から小学校低学年までは、まず意欲と集中力の育成に重点をおいています。積極的な意欲と集中力のある子どもの場合は、仮に学校での学習時間や内容が少なくなっても、それこそ「1 教えたら 10 学ぼう」とする意欲を発揮して、自分から主体的に学習を進めていくことが出来るし、また習得率も高くなるからです。

入園したばかりの年少児（3 歳児）は、知能あそびを見ていると一つの遊びに集中

できる時間は、せいぜい 15 分から 30 分程度です。なかには、教師の説明はほとんど聞けず、周囲のことが気になり立ち歩くなど、なかなか集中して取り組めない子もいます。それが 3 学期頃になってくると、ほとんどの子が 40 分ぐらいは集中力が持続出来るようになってきます。年長児（5 歳児）になると、与える教材（遊びの内容）さえ適切であれば、80 分間の知能あそびの時間が過ぎて昼食の時間になっても、「もっとやりたい！」言って、遊びを継続することもしばしばです。

このように幼稚園時代は、一人ひとりの子どもをよく観察していると、見違えるように意欲と集中力が身についてくるのが分ります。（意欲と集中力だけではなく、その他の面も同様ですが。）この幼児期の 3 年間の成長は、小学校入学後の 3 年間の成長の比ではありません。特に、高学年になっても意欲と集中力が十分身についていない子どもの学習指導は、大変苦勞が伴います。ですから、私たちは幼稚園と小学校の指導上の連携を深め、3 歳児から 3 年生ぐらいまでは、意欲と集中力の育成、つまり主体的に学ぶ態度を育てることに重点をおいているわけです。

こうした意欲と集中力を育成していくためには、日頃から授業（遊び）研究を深め、授業内容や方法に工夫が必要になることは言うまでもありません。子どもたちが授業（遊び）に意欲的に集中して取り組む条件としては、

- 学習（遊び）内容に興味・関心があること
- 難易度が適切であること
- 学習内容に発展性があること

等が重要な要素になってきます。ですから聖徳では、平素から教材研究と教材・教具の作成にはかなり力を注いでいるのです。こうして低学年の間に、意欲と集中力を育成しておく、高学年になるにつれて学力もめきめきと向上してきます。

よく聖徳学園小学校の卒業生は、中学や大学への進学実績が高いが、どのような受験指導をしているのかと言ったような質問を受けます。学校では、特別な受験指導をしているわけではありませんが、受験においても意欲と集中力、知能教育の成果は、結果的に大きなプラスになっていることは事実です。このことは、中学受験より大学受験と上級学校になればなるほど、効果を発揮しています。

●創造的知能の開発と育成

意欲と集中力の成果は、学力の向上だけではありません。創造的知能の開発と育成にも大きな成果を発揮してきます。

創造性の教育成果は、評価することはなかなか難しいのですが、一例として発明協会が毎年実施している、「東京都児童生徒発明くふう展」での成果を紹介します。聖徳では、毎年夏休み明けの9月に自由研究展を開催します。これにはほとんど全員の児童が、自分の興味・関心に基づき課題を見つけて、それについてまとめたり製作した作品を出品しています。児童によっては、小学校6年間一貫したテーマで研究を継続して取り組んでいる者もいます。この中から、校内審査を経て「東京都児童生徒発明くふう展」に該当する作品を15点（1校あたり15点までに限定）出品します。その結果、毎年10点くらいの作品が入賞し、これまで25回「学校賞」を受賞しました。そして東京都代表として全国コンクールに出品され、毎年2～3名の作品が入賞しています。

こうした成果を過分に評価していただき、文部科学大臣から7回目の「創意工夫育成功労学校賞」を受賞いたしました。このように、創造的知能の開発と育成ではかなり成果を挙げてきたように思っています。この創造性の開発と育成の条件を、これまでの実践結果から要約すると概ね次の通りです。

① 創造的態度を育成する

意欲・集中力・好奇心・根気・いろいろ工夫する態度等

② 個性を啓発して伸長する

③ 創造的知能を刺激し育成する

④ 直観力（直観的思考・ひらめき）を育成する

⑤ 個性と創造性を認め合える学校環境を整える

等です。本日の授業の様子から、少しでも汲み取っていただければと思います。

●個性と能力差に対応した複数指導（担任）制

子どもの個性や能力・発達段階は、一人ひとり異なることは言うまでもありません。これに対して一人ひとりにきめ細かな指導をしていくためには、まず少人数による学級編成が必要になってきます。少人数といっても、学校では子ども同士学び合い、刺

激し合い、切磋琢磨しながら成長していく側面も大きいので、あまり1学級の人数を少なくすることには教育効果の上で感心しません。また、小集団でなければ、自分の力を発揮できないような子どもに育てても困るのです。

そこで聖徳では、昭和54年度から1学級の人数は約30名にして、個人差が顕著な知能訓練や数学の授業において、2人担任制を試みました。これは一つの教室に2人の担任が入って授業を進めるわけですから、2人の担任の綿密な連携が前提になりますが、個別学習に重点をおく知能訓練や数学の授業では、かなり効果を発揮することが明確になってきました。

現在、複数指導（担任）制を実施しているのは、

幼稚園では、学級担任 カリキュラムあそび

小学校では、学級担任 知能訓練 ゲーム 工作 数学（1～3年生）です。

また、学年が進むにつれて能力差は段々広がってきますので、数学と知能訓練では3年生から、そして国語と英語は5年生から能力（習熟度）別にクラス編成して授業を進めております。そのために、一人ひとりの子どもがゆとりを持って授業に取り組み、各自の能力の限界に挑戦することが可能になります。

本学園では複数指導（担任）制のねらいを、できるだけ多く（複数）の教師の眼で

① 一人ひとりの子どもを指導する

② 一人ひとりの子どもの個性と能力差に対応したきめ細かな指導をする

この2点にあります。本日の授業を通して、複数指導（担任）制の利点を汲み取っていただけたらと思います。

以上の通り、聖徳の教育の基本的な考え方と本日の公開授業（保育）の視点を簡単にまとめておきました。私たちの趣旨を少しでもご理解戴ければ幸いです。

また、本日の授業（保育）内容につきましては、「懇談会」において、意見交換していきたいと思います。どうぞお気軽にご出席ください。このところ学校教育のあり方について関心を集めておりますが、21世紀を生きる子どもたちの健全な成長を求めて、皆さん方と共に理想的な授業のあり方を追究していきたいと考えております。本日は、ご参会戴き誠にありがとうございました。

目 次

第45回 公開研究発表会に当たって	5
発表会要項 (時程表)	11
会場案内図	13

幼稚園の指導案

◇公開保育〈9：15～10：00〉

本日の公開保育について	17
3歳児 (ほし組)「造形あそび」	18
3歳児 (はな組)「リトミックあそび」	20
4歳児 (そら・もり組)「体育あそび」	23
4歳児 (そら・もり組)「造形あそび」	26
5歳児 (つき・やま組)「知能あそび」	28
5歳児 (つき・やま組)「リトミックあそび」	32

小学校の指導案

◇公開授業〈9：15～10：15〉

1年生 (はまかぜ組)「国語」	37
1年生 (わかしお組)「知能訓練」	40
2年生 (あずさ組)「知能訓練」	45
2年生 (やくも組)「数学」	49
3年生 (つばさ組)「地理」	51
3年生 (みずほ組)「英語」	54
3年生 (みずほ組)「英語」	56
5年生 (あさま組)「理科」	58
5年生 (ほくと組)「歴史」	60
6年生 (あけぼの組)「理科」	62
6年生 (はくたか組)「歴史」	64

全体会 〈10：30～12：00〉

講演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」	67
園児・児童発表 年長児 歌 唱	
4年生 合 唱	
研究発表「未来をひらく戦士を育てるために ～一年生の学級経営を中心に～」	

平成25年度の研究活動計画

研究部の活動計画	71
知能教育研究部の活動計画	72
国語科研究部の活動計画	73
数学科研究部の活動計画	74
英語科研究部の活動計画	75
理科研究部の活動計画	76
地理科研究部の活動計画	77
歴史科研究部の活動計画	78
体育科研究部の活動計画	79
音楽科研究部の活動計画	80
美術科研究部の活動計画	81
家庭科研究部の活動計画	82

研究発表会のあゆみ	83
-----------	----

発 表 会 要 項

1. 主 題：英才教室の追究

創造的知能の開発と育成（XVII）

個性と能力差に対応した複数指導（担任）制（XI）

2. 時 程

	9:00 9:15	10:00 10:15	10:30	12:00	12:15	13:00
受付	保育公開	休憩	全体会 1. 講演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」 2. 園児・児童発表 3. 研究発表	休憩	懇談会	解散
	授業公開					

3. 内 容

(1) 授業公開及び保育公開

◇ 保育公開（幼稚園 9：15～10：00） ※4・5歳児は、興味・関心に応じた選択制になっています。

年齢	組	領 域	あそび設定の視点	あそびの題目及び内容	会場	頁
3歳	ほし	造形あそび	一人ひとりの発想を引き出す二人指導	どんな魚ができるかな？ ～えのぐを使って～	ほし	18
	はな	リトミックあそび	一人ひとりの表現を大切に二人指導	車に乗ってどこに行こうかな？ ～イメージ表現を楽しむ～	はな	20
4歳	そら もり	体育あそび	一人ひとりの発達段階に応じた二人指導	ラダーで遊ぼう！	ホール	23
		造形あそび	豊かな発想力を引き出す絵画遊び	だれの足あとかな？	そら	26
5歳	つき やま	知能あそび	一人ひとりの図形的な能力を引き出す 二人指導	道つなぎパズル	やま	28
		リトミックあそび	イメージの世界で音楽的能力を高めて いく表現活動	音楽王国からの挑戦状	つき	32

◇ 授業公開（小学校 9：15～10：15）

学年	組	教科	授業設定の視点	授業の題目及び内容	会場	頁
1年	はまかぜ	国語	一人ひとりの個性（興味・関心）に応じた学習指導	『音感語』 ～擬声・擬態語～ 二音のくりかえしによるイメージの言語化を図る	はまかぜ	37
	わかしお	知能訓練	パズルを通して創造的知能の開発と育成を目指した指導	『モザイクパズル』 ～透明ピースの置き方を柔軟に考えよう！～	わかしお	40
2年	あずさ	知能訓練	ゲームを通して柔軟な思考の育成を目指した指導	『宝とり双六』 ～サイコロの目数を上手に活かしてゲームを進めよう～	あずさ	45
	やくも	数学	ゲームを通して創造的知能の開発と育成を目指した指導	『三山くずし』を楽しみながら、相手の手を予測し必勝法について考える	やくも	49
3年	つばさ	地理	様々な道案内を考え、創造的知能の開発と育成を目指した指導	『地図の中を探検しよう』 ～八方位や地図記号を使って～	つばさ	51
	みずほ	英語	一人ひとりの個性や興味・関心、能力に応じた英語学習	動物の名前や体の特徴などを英語で楽しく学ぶ	みずほ	54
あけぼの					56	

学年	組	教科	授業設定の視点	授業の題目及び内容	会場	頁
5年	あさま	理科	創造的知能を発揮して、毛細管現象の要因を探る学習指導	毛細管現象が、どのようなときに顕著にあらわれるのか、その要因を探る	多目的情報室	58
	ほくと	歴史	創造的知能の開発と育成を目指した学習指導	人物伝『吉田松陰』 松下村塾に人が集まる理由を、門下生の視点から探る	ほくと	60
6年	あけぼの	理科	化学実験を通して創造的知能の開発と育成を目指した指導	燃焼前後での物質変化について考える ～植物体と金属の燃焼について～	理科実験室	62
	はくたか	歴史	一人ひとりの興味・関心に応じ、発表を中心とした学習	江戸時代『鎖国の中での小さな窓』 出島文化がどう吸収されたか考える	はくたか	64

(2) 全体会（会場：講堂 10：30～12：00）

- * 講演 聖徳学園小学校・幼稚園の教育 校長・園長 加賀光悦
- * 園児発表 年長児 歌唱
4年生 合唱
- * 研究発表 未来をひらく戦士を育てるために ～一年生の学級経営を中心に～
低学年主任 由里敏夫

(3) 懇談会（会場：講堂・2、3階教室 12：15～13：00）

- * 懇談会は、下記の三つの分科会に分かれて行います。

分科会名	主 題	主な出席教員
聖徳学園の教育	聖徳の教育の特色 (聖徳学園小学校・幼稚園の概要についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。)	学校長 幼稚園担当者 小学校担当者
幼稚園教育	授 業 を も と に 本 日 の 保 育 ・	創造的知能の開発と育成を目指した学習指導 個性と能力差に対応した複数指導（担任）制 (保育内容についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。)
小学校教育		創造的知能の開発と育成を目指した学習指導 個性と能力差に対応した複数指導（担任）制 (教科教育についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。)

* 総合案内（9：00～10：30）

6号館2F（1年わかしお組前廊下）に、教職員・案内役が待機しております。教室の場所、授業案内等、ご質問がございましたら、お気軽にお声がけください。

また、本日の内容及び本学園の教育についてのご意見やご質問がありましたら、懇談会へ是非ご参加ください。そちらでお受けいたしております。

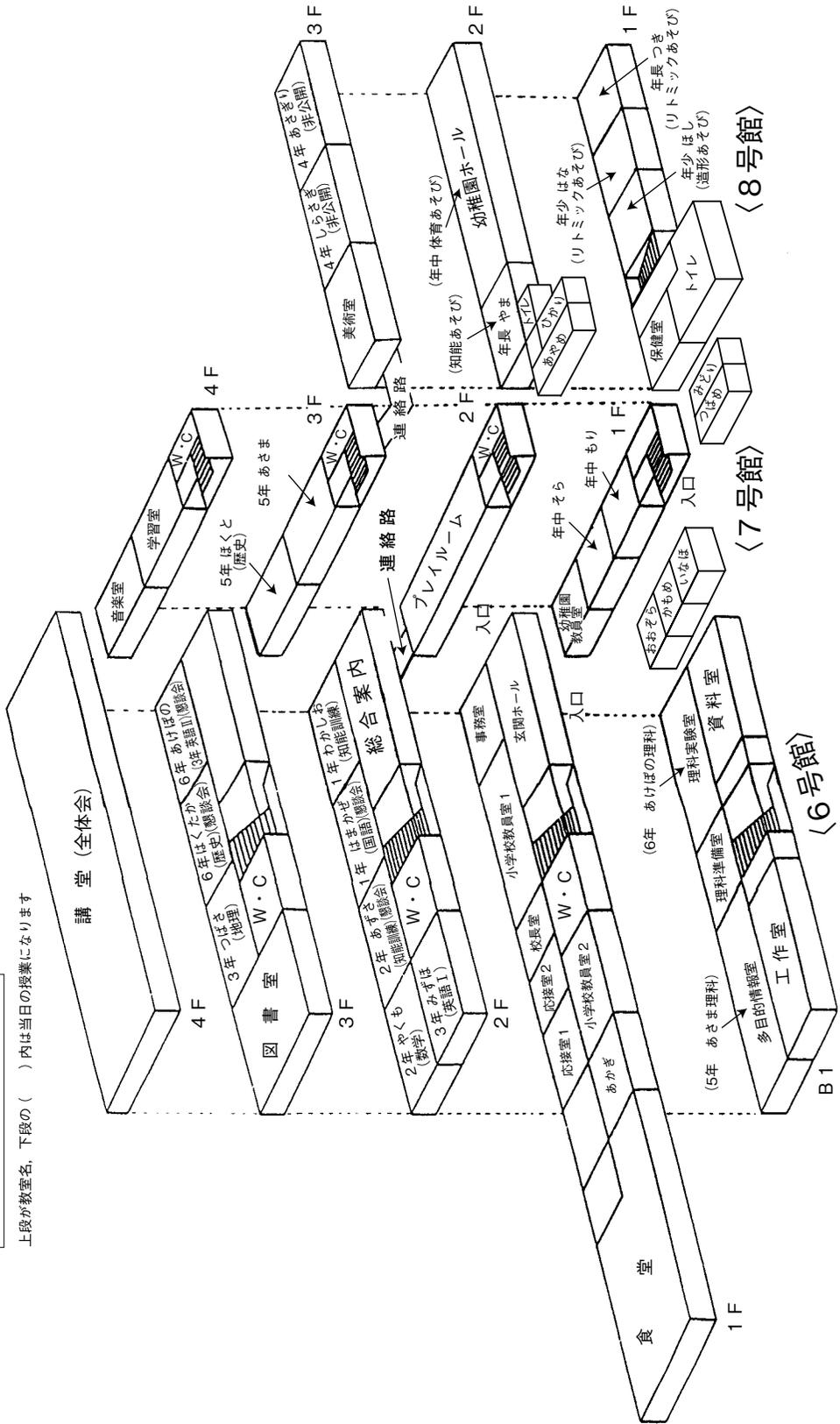
* 参考文献

- 「聖徳の教育」 聖徳幼稚園・聖徳学園小学校刊
- 「数学教材シリーズ」 聖徳学園小学校刊（実費にておわけします）
- 「国語教材シリーズ」 聖徳学園小学校刊（実費にておわけします）
- 「地理教材シリーズ」 聖徳学園小学校刊（実費にておわけします）

聖徳学園 幼稚園 案内図

6号館と7号館は2階で連絡しています

上段が教室名、下段の()内は当日の授業になります



幼稚園の部

本日の公開保育について

本園では、「自由保育」を実施しておりますが、その主な活動は、

自由あそび

カリキュラムあそび

の2つの方法で進めています。

カリキュラムあそびは、

- ◇ 知能あそび
- ◇ 体育あそび
- ◇ リトミックあそび
- ◇ 造形・絵画あそびの4つのあそびがあります。

4歳・5歳児は、この中の4つのあそびの中から2つのあそびを設定しました。

園児は2つのあそびの内容を担当の先生より聞いて、自分の好きなあそびの方を主体的に選択して遊びます。

本日の活動は下記の通りです。

		9時15分～10時15分	内 容	
3歳児	ほし・はな	ほし	<ul style="list-style-type: none"> ・造形あそび (クラス活動) 	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな魚ができるかな？ ～絵の具を使って～
		はな	<ul style="list-style-type: none"> ・リトミックあそび (クラス活動) 	<ul style="list-style-type: none"> ・車に乗ってどこに行こうかな？ ～イメージ表現を楽しむ～
4歳児	そら・もり	<ul style="list-style-type: none"> ・体育あそび ・造形あそび (選択性) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ラダーで遊ぼう！ ・だれの足あとかな？ 	
5歳児	つき・やま	<ul style="list-style-type: none"> ・知能あそび ・リトミックあそび (選択性) 	<ul style="list-style-type: none"> ・道つなぎパズル ・音楽王国からの挑戦状 	

選択の時間	9時00分から9時15分	子ども達が、内容説明を聞いて選択します。
選択の場所	4歳児 そら組にて行います。	
	5歳児 幼稚園ホールにて行います。	

造形あそび指導案

9:15 ~ 10:00 於: ほし組保育室

指導者 磯 沼 美 紀
久 保 千 春

1. 年 齢: 3 歳児 (ほし組)
2. あそび設定の視点: 一人ひとりの発想を引き出す二人指導
3. 主 題: どんな魚ができるかな? ~絵の具を使って~
4. 主題について

今までは絵の具を手で触ったり、筆で絵を描いたりという経験は造形あそびでもしている。今回は、海をテーマに「タンポ」や「ローラー」を使いながら描いていく。絵の具の混色を楽しんだり、模様を楽しみながら、個々の発想を引き出せるよう援助していく。

5. 園児の様子

入園して間もない子ども達。少しずつ園生活にも慣れてきた。自由遊びでは好きなあそびをみつけ安定して遊べるようにもなり、また、4つのカリキュラムあそびにも興味を持って取り組む姿が見られるようになってきた。それぞれのあそびの楽しさを理解し取り組めるようになった。造形遊びでは、作品になる喜びを感じているところである。

6. 本時のねらい

タンポやローラーを使いながら絵の具で描くことで出来る模様や混色を楽しみながら、海や魚作りを楽しめるようにする。

7. 本時の指導過程

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
1. 始まりの挨拶をする。	T1・T2: 活動に入る挨拶をする。
2. 本時の内容の説明を聞く。	T1: 本時の活動内容を説明する。 T2: 子ども達の聞く様子を観察しながら、個別に声をかけ理解できるよう援助していく。
3. 魚を作ろう。 魚の土台を作る	T1: 好きな形をのびのびと描くように声をかける。
Ⅰ 画用紙をもらう。	T1・T2: はさみの使い方は個別に指導しながら援助していく。
Ⅱ 好きな魚の絵を描く。	
Ⅲ はさみで切る。	

<p>タンポをしよう</p> <p>I 台紙にクレヨンで目を描く。</p> <p>II 自分の好きな絵の具をスタンプ台でタンポにつけ、魚の土台に色つけをしていく。</p> <p>III いろいろな絵の具をつけ混色を楽しむ。</p> <p>IV 乾かす。</p> <p>4. 海を作ろう。 模造紙にローラーで模様をつけ、海を描いていく。</p> <p>5. 片付けをする。</p> <p>6. 出来上がった鑑賞する。</p> <p>7. 挨拶をする。</p>	<p>T1：クレヨンは強めに描くよう声かけをする。</p> <p>T1・T2：混色しすぎないよう個々に様子を見ながら援助していく。</p> <p>T1：どんな模様ができるか声かけをしながら、模様作りを楽しめるように進めていく。</p> <p>T1・T2：安全に片付けることができるよう声をかけていく。</p> <p>T1：出来上がりをみんなで楽しめるような雰囲気を作る。</p> <p>• 次回の活動に期待が持てるようにする。</p>
--	---

8. 評価

子ども達が意欲的に取り組み、それぞれの表現を楽しむことができたかを指導者間で確認し、評価していく。

リトミックあそび指導案

9:15 ~ 10:00 於: はな組保育室

指導者 荒井明子
大下真由美

1. 年齢: 3歳児 (はな組)
2. あそび設定の視点: 一人ひとりの表現を大切に二人指導
3. 主題: 車に乗ってどこに行こうかな? ~イメージ表現を楽しむ~
4. 主題について

子ども達は、何かになりきって遊ぶ『ごっこあそび』が好きである。男の子だったら正義の味方になって戦ったり、女の子だったらお母さんになってお人形をお世話したりと、常にイメージの世界の中で遊んでいる。本時はそういった子ども達のイメージしたものを大切にしながら、音を通して即時反応や音の聴き分け、音の高低を体験し、自由表現を楽しむ。

5. 園児の様子

入園して約2ヶ月の子ども達は、毎日好きな遊びをしながら友だちと少しずつ関わられるようになってきた。朝や帰りのお集まりで行う手遊びでは、必ず「もう一回やりたい。」と言うほど喜んでやっていたり、歌を身振りを付けながら大きな声で歌ったりしている。週に一度のリトミックあそびでも、ピアノの音に合わせて動いて楽しく活動している姿が見られる。

6. 本時のねらい

- ・即時反応や音の聴き分け、音の高低を体験する。
- ・イメージの世界の中で伸びのびと表現する。

7. 本時の指導過程

教材の内容及び活動	指導上の留意点
<p>準備</p> <p>裸足になる</p> <p>手あそびをする</p> <p>円になる</p> <p>1. はじまりのうた、あいさつ</p> <p>2. 模唱 (お返事はい)</p> <p>全体で……『みなさん』『はあい』</p> <p>一人ずつ……『○○ちゃん』『はあい』</p>	<p>準備</p> <p>空間を広く使えるよう、環境作りをする。</p> <p>T1: 全体を通してピアノを中心に活動を進めていく。</p> <p>T2: 子ども達と一緒に活動し、様子を見ながら適宜援助していく。</p> <p>T1・T2: これから活動が始まる意識を持たせるようにする。</p>

3. ウォーミングアップ

「♪」…歩く 「♪」…ゆっくり歩く

「♪♪」…かけ足

4. 『車に乗ってどこに行こうかな?』

〈導入〉

今日はみんなで車に乗って、お出かけしたいと思います。

〈GO&STOP〉

車に乗って出発!

- 「♪」 少し早く走る。
- 「stop」 赤信号で止まる。
- 「トンネル」 フープをくぐる。

〈音の聴き分け〉

到着しました。ここからは車を降りて、みんなでお散歩しましょう。

- 「♪」 …歩く
- 「ハチがきたら?」 …手ではらう
- 「ヘビがいたら?」 …お友だちと手をつないでしゃがむ

〈音の高低〉

花びらを取ってみよう。

- 高い音…高いところの花びらを取る。
- 低い音…低いところの花びらを取る。

〈模唱 & 表現〉

何色の花が咲かせようかな?

- ハンドサインをつけて色を模唱する。
- 風に揺れる。

T2: なかなか取り組めない子どもがいたら励ましながら、一緒に行く。

T2: 子ども同士がぶつからないように配慮しながら一緒に動く。

T1: 子どもの興味を引きつけるように話し、子どもの意見を聞く。

T1: 子どもの様子を見ながら速度を変える。

T2: 子ども同士がぶつからないように、安全に配慮する。

T1: 子どもを一度座らせて、気持ちを落ち着かせてから次の話をする。

T1: 子どものイメージしたものを引き出し、動きを見ながら合図を出す。

T2: 怖がる子どもには付き添ってあげる。

T1: 子どもの動きを見ながら、合図を出す。

T1: 音の高さをはっきりと示す。

T2: イメージした色に合わせて、カラーズカーフを配る。

体育あそび指導案

9：15～10：00 於：幼稚園ホール

指導者 佐藤 憲夫
渡辺 由美子

1. 年齢：4歳児（そら組・もり組）
2. あそび設定の視点：一人ひとりを活かした二人指導
3. 主題：ラダーで遊ぼう！～基礎感覚を養う～
4. 主題について

ラダートレーニングとは、縄梯子のような器具を使って、敏捷性を高めるトレーニングのことである。この練習は、地域のサッカーやラグビーなどの少年スポーツクラブのトレーニングとして取り入れられている。このトレーニングは、素早く動くためには「どう動くべきか」を判断（脳からの指令により）し、実際に身体を動かすという2つのプロセスをうまく連動させられるかが大きな鍵となってくる。

これは神経系（脳からの指令により、身体を動かす）のトレーニングに効果的であり、あらゆるスポーツに対する適応力を高めることができる。このラダーは遊びの要素を含んでいるため、楽しく活動することができる。

注意点として、まずは「正確」に行うことである。スピードを意識すると、踏み外しや、踏み間違いをしてしまうことがあるが、決められた動きの中で、「正確に」、そして「素早く」動こうとすることで、神経系の能力、そして調整力を高めていきたいと思う。

5. 園児の様子

当学年は、男児42名、女児14名と男児の比率が多い学年である。そのせいもあり、自由あそびでは、戸外でアスレチックやスクーターあそびで元気に遊ぶ姿が見られる。また、4月末から始まった選択制でも、毎回多くの子ども達の参加が続いている。

楽しく、元気に参加しながらも、安全に対するルールを守りながら、それぞれの発達、経験段階に沿った援助をしていきたい。今回、ラダーに挑戦するが、初めての経験で、最初はとても難しく感じ、悪戦苦闘するかもしれないが、徐々に慣れながら、動きを楽しんでほしいと思う。

6. 本時のねらい

- 色々な動きに挑戦しながら、調整力を養う。
- ラダーのルールを理解して、楽しく行えるようにする。

7. 本時の指導過程

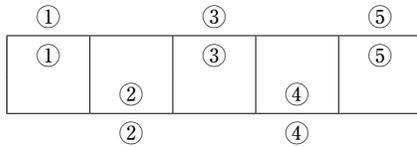
*最初に2つ（造形あそび・体育あそび）の活動内容を子ども達に説明して選択させる。

時間：9：00～9：15 場所：そら組

園児の活動	指導上の留意点																														
<p>1. 整列と出席の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスごとに整列させる。 <p>2. 準備体操</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体をあたため、これからの活動が十分に行えるように準備体操をする。 <p>3. 挨拶</p> <p>4. 本時の内容と説明</p> <p>5. ウォーミングアップのラダートレーニング・線を目印にして跳ぶ。</p> <p>1) 前後ジャンプ×10回×1～2セット</p> <p>2) 左右ジャンプ×10回×1～2セット</p> <p>3) 前後交互ジャンプ×10回×1～2セット</p> <p>5. ラダートレーニング (図参照) (簡単な動きから難しい動きへ)</p> <p>1) 両足ジャンプ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・両足を揃えてできるだけ早くジャンプ。 <p>→</p> <table border="1" data-bbox="207 1261 622 1338"> <tr> <td>①</td> <td>②</td> <td>③</td> <td>④</td> <td>⑤</td> </tr> <tr> <td>①</td> <td>②</td> <td>③</td> <td>④</td> <td>⑤</td> </tr> </table> <p>2) 開閉ジャンプ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・両足でジャンプし、両足で開閉して着地する。 <p>→</p> <table border="1" data-bbox="207 1570 622 1715"> <tr> <td></td> <td>②</td> <td></td> <td>④</td> <td></td> </tr> <tr> <td>①</td> <td></td> <td>③</td> <td></td> <td>⑤</td> </tr> <tr> <td>①</td> <td></td> <td>③</td> <td></td> <td>⑤</td> </tr> <tr> <td></td> <td>②</td> <td></td> <td>④</td> <td></td> </tr> </table>	①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤		②		④		①		③		⑤	①		③		⑤		②		④		<p>・教師の動きを見ながら、元気よく体操を行えるようにする。</p> <div data-bbox="710 517 1199 647" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>～指導者の動き～</p> <p>T1：子ども達の前で見本を示す。</p> <p>T2：巡回しながら一人ひとりの様子を見る。</p> </div> <p>・整列させて元気よく挨拶ができるようにする。</p> <p>・本時の予定と注意事項を説明する。</p> <p>※線またはロープを使用。</p> <div data-bbox="710 865 1199 994" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>～指導者の動き～</p> <p>T1・T2：うまくできない子どもには補助しながら励ましの言葉をかけていく。</p> </div> <p>※ラダー 4 台使用</p> <div data-bbox="710 1180 1199 1421" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>～指導者の動き～</p> <p>T1：子ども達の前で見本を示しながら、リードしていく。</p> <p>T2：子ども達を補助しつつ、一人ひとりの活動を認めながら、励ましの言葉をかけていく。</p> </div>
①	②	③	④	⑤																											
①	②	③	④	⑤																											
	②		④																												
①		③		⑤																											
①		③		⑤																											
	②		④																												

3) スラロームジャンプ（前）

- 足を揃えて左右にジャンプしながら進む。
-



6. 発表

最後に1)～3)まで行った内容の中から好きな動きを発表してもらおう。

7. 整理体操

8. 整列・挨拶・まとめ

～指導者の動き～

T1：子ども達の前で見本を示しながら、リードしていく。

T2：子ども達を補助しつつ、一人ひとりの活動を認めながら、励ましの言葉をかけていく。

- 今回行った中で、興味（好き）を持ったものを発表させる。

- 本時のまとめと次回の活動について話し、期待を持たせるようにする。

8. 評価

- 色々な動きに興味を持って、楽しく取り組めたか。

主に、一人ひとりの取り組み姿勢や反応などを複数の指導者で確認しながら評価していく。

造形あそび指導案

9:15～10:00 於：そら組保育室

指導者 永坂圭子
神 山 祐 希

1. 年 齢：4 歳児 (そら・もり組)
2. あそび設定の視点：豊かな想像力を引き出す絵画あそび
3. 主 題：だれの足あとかな？
4. 主題について

ぺたぺたとスタンプングしてできた模様。だれの足あとなのかな？と想像してみる。実際の動物、自分が考えた空想の生き物など、子どもたちがそれぞれの発想をし、様々に想像を膨らましていけるような活動になればこの教材を考えてみた。また、絵の具の活動も好きな子どもたち。のびのびと絵の具あそびができればと思う。

5. 園児の様子

日常の遊びの中でも造形的な活動の好きな子どもも多く、空き箱工作、粘土遊びなども喜んで取り組む年中組の子ども達である。絵の具の活動も汚れたりすること、ぺたぺたどろどろも大好きで喜んで取り組んでいる。

今回は、“足あと”から、子どもたちが様々に想像を膨らませて、絵画あそびをしていければと思う。

6. 本時のねらい

- ・足あとから、それぞれの自由な発想を引き出していく。
- ・クレヨン、絵の具で楽しく絵画をできるようにする。

7. 本時の指導過程

*最初に2つ（造形あそび・体育あそび）の活動内容を子ども達に説明して選択させる。

時間：9:00～9:15 場所：そら組保育室

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
1. 始まりの挨拶をする。	T1：これからの活動に期待を持てるように説明していく。 T1・T2：塗りつぶさないよう気を付けていく。
2. 本時の内容の説明を聞く。	
3. 画用紙に、紙を丸めたものでスタンプングをし、足あとを作る。	

4. 足あとの画用紙にのぞき穴を作る。	T2 : うまく穴があけられない子どもには援助をする。 穴を覗くことで想像の世界に入りこめるようにする。
5. 足あとの画用紙を開くと大きな紙になるように紙を付け足し、だれの足あとなのかを想像する。	T1・T2 : 子どもたち一人ひとりが自由な発想ができるように声をかけていく。 T1 : 実際の動物でも、自分が考えた生き物でも良いことを話し想像の幅が広がるようにする。
6. クレヨンでお絵かきをする。	T1・T2 : 大きな紙にのびのびと描いていけるように声をかけていく。
7. 絵の具で仕上げをする。	T1・T2 : クレヨンの絵をつぶしてしまわないようにアドバイスをする。
8. 片付けをする。	T2 : みんなで片付けをするように声をかける。
9. 鑑賞する。	T1 : 作品を鑑賞することにより、お友だちの発想も認めていけるようにする。
10. 挨拶をする。	T1 : 本時のまとめをして次回に期待を持てるようにする。

8. 評価

- それぞれの子ども達が足あとから想像を膨らますことができたか。
 - クレヨンや絵の具で絵画活動をたのしむことができたか。
- * これらの点を指導者間で確認し、評価していく。

知能あそび指導案

9:15 ~ 10:00 於: やま組保育室

指導者 大 嶋 比査子
飯 濱 久美子

1. 年 齢: 5 歳児 (つき組・やま組)
2. あそび設定の視点: 一人ひとりの図形的な能力を引き出す二人指導
3. 教材名: 「道つなぎパズル」
4. 本時刺激される知能因子: 図形で体系を評価する (EFS)
5. 本時のねらい

途切れた道を太さや曲がり方、線の特徴などに考慮して空欄に当てはまるピースを選び、道をつなげていくことにより、図形で体系を評価する能力を育てる。

6. 教材について

知能あそびでは、知能の発達が著しいこの時期に子ども達が示す興味、関心の芽を育み、知的好奇心を刺激しながら、自分で考え楽しめる教材を用意して活動している。

年長では形作りや迷路などの図形的な教材、双六や数合わせゲームなどの記号的な教材、スリーヒントクイズやお話の不合理的を考える概念的な教材など、素材や形式を工夫して年間 26 教材作成しているが、なかでも子ども達に人気があるのがパズルである。そこでいくつかあるパズルの中から、道つなぎパズルを取り上げた。

子ども達は日常、電車の路線地図や旅行のパンフレットの地図を目にすることがある。また最近では車のナビを見る機会が多く、地図に興味を持っている子も多い。今回はグループで取り組む、道、川、線路などが描かれた絵地図パズルと、個別で取り組む白い線と黒い線が重なったサーキットコースのように行き止まりのない道パズルを用意した。所々が□の空欄になっていて、途切れた道に□のピースを当てはめて完成させる形式である。絵地図パズルは、カラーなので色もヒントになり、最初のパズルとしてやり方を知るという点では有効である。次に個別のパズルに進めるが、白い線と黒い線の重なる部分で、どの線が上になるか下になるかがポイントになり、直線と曲線のピースを、全体の道を見通して曲がる位置がどこになるかを判断していく。後半は道も複雑になり、ピースも増えていき難易度が高いパズルになっているので、出来るだけ粘り強く取り組めるように個々の様子を見ながら全体図を見せるなど助言をし、二人の目できめ細やかに指導にあたりたい。しかし後半のパズルが難しい子どもにはカラーの絵地図プリントパズルを用意し、能力差の対応を考えている。そしてこの教材を通して、パズルへの興味だけでなく、地図にも興味を持って、自分で描いてみるなど、新しいことにも挑戦して欲しいと願っている。

7. 園児のようす

子ども達は週2回、カリキュラムあそびの時間に2つの活動の中から、知能あそびを選択する機会がある。その日に行う内容の説明を聞き、「やってみよう!」「面白そうだ!」「得意なものだ!」などそれぞれの思いで興味を持った子が集まってくる。考えることが大好きで、毎回のように選んでくる子もいる。

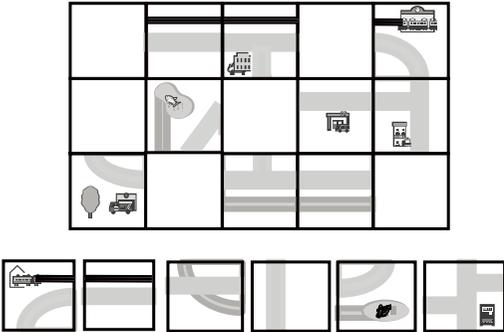
4月に行った7並べのカードゲームでは、お友達とルールを守ってとても楽しそうに何回戦も取り組んでいた。また数の順番に線を引いていく点つなぎでは次々と夢中で進めていた。終わりの時間になって全部の問題が出来なかった子どもは「最後までやりたかった。」と、とても残念そうだったので、2回目の時間も出してあげて伝えると、「続きをやる!」と張り切っていた。やりたいことを自分で選んでくることもあって、積極的に取り組んでいたりと、内容が難しくなっても粘り強く取り組んでいることも多い。子ども達が考えることを楽しんで「もっとやりたかった」「もう一回やる?」という言葉が、教材作成の一番の力になっている。

今回のパズルは難易度の幅を広げて用意しているが、後半の問題にも挑戦し、達成感を味わって欲しい。これまでの取り組みでは難問にも最後まで諦めず、考えている場面もたくさん見られたので、期待したい。

8. 本時の指導過程

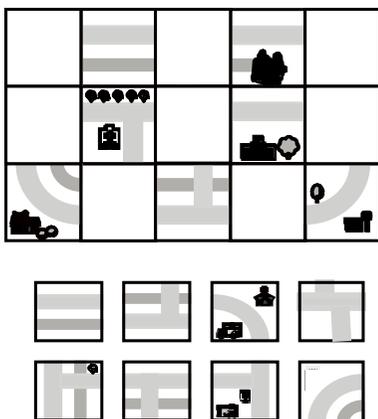
*最初に2つ（知能あそび・リトミックあそび）の活動内容を子ども達に説明して選択させる。

時間：9：00～9：15 場所：ホール

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点等
<p>1. 始まりのあいさつをする。</p> <p>2. パズルの説明を聞いて、やり方を理解する。</p> <p>【説明用パズル】</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 出席確認して、本日の健康状態等を把握する。 <p>T1</p> <ul style="list-style-type: none"> 説明用のパズルを提示して、空欄にどのピースを入れたら、道につながるかを判断させる。 子ども達と一緒に考え、意見を求めている。 進め方と作業について説明する。 <p>T2</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども達がやり方を理解しているか、一人ひとりの反応と様子を見る。

3. 椅子を出して、それぞれの席につき、グループでパズルに取り組む。

【パズル A】

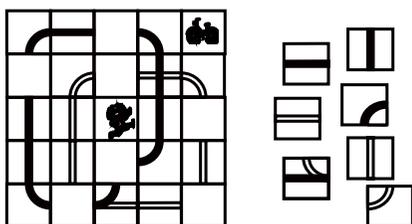


• 完成出来たら、確認してもらい、次に進めていく。

4. パズル A を終えたグループから、片付けて、個別にパズル B に取り組む。

【パズル B】

No.1



• ピースを袋から出して、空欄に当てはまるピースを入れて完成する。出来たら確認してもらい、次に進めていく。

• No.5 までの冊子が終わったら、片付けて、No.6 のパズルを取りにいく。

T 2

• 子ども達の移動に気を配りそれぞれの席に着くように指示をする。

T 1

• 机を配置し、パズルとピースを配る。

T 1・T 2

• 始めはピースを均等に配るなど、皆で協力して取り組めるように、留意する。
• 机間巡視して、道路、川、線路の曲がり方や、全体を見て、どのようにつながるかを見通しを立てて、考えさせる。

T 1・T 2

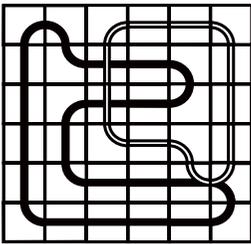
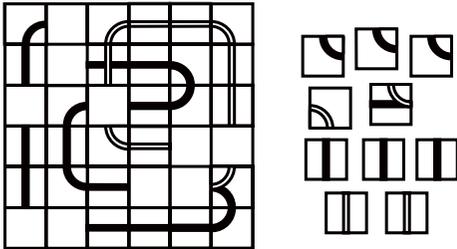
• パズル A を終えたグループから、個別にパズル B の No.1 ~ 5 の冊子とピースを配り、作業がスムーズに行えるように指示する。

T 1・T 2

① 白い線と黒い線が重なっているところで、どちらの線が上になっているか。
② 全体の道を見通して曲がる位置がどこになるか。
③ カードの向きに留意して判断出来ているか。
などに留意して、机間巡視しながら滞っている子には、空欄に 1 ピース入れるなど適宜指導、助言をしていく。

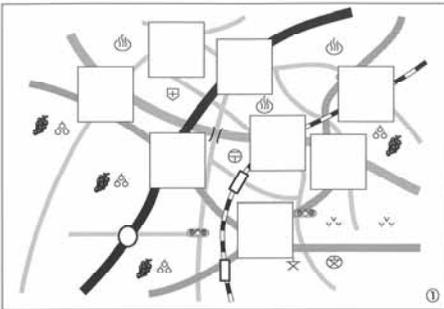
• No.6 ~ 10 のパズルは、1 題ごと棚に並べてあるので、No.5 の冊子が終わったら片付けさせて自分で取りに来るように指示をする。

No.6



完成見本

【絵地図プリントパズル】



5. 片付けとあいさつ

- ピースを袋に入れて、パズルを片付ける。
- 終わりのあいさつをする。

- 道が複雑になり、ピースの数も増えるので苦勞している子には、適宜ヒントになる部分を示したり、完成見本を見せるなど、助言を与えていくが、出来るだけ、自分の力でやり遂げようとする姿勢を大切にしてい

- カラーの絵地図プリントパズルを用意して、気持ちの続かない子や能力差に対応し、適宜与えていく。

T1

- 片付けの手順を指示する。

T1・T2

- 本時のまとめをし、終わりのあいさつをする。

9. 評価

- ①パズルに興味を持って、考えることを楽しんでたか。
 - ②道の特徴、曲がり方、ピースの向きなど自分で気付いて、判断出来てたか。
- 以上の観点から、一人ひとりの取り組みと反応を指導者間で確認し評価していく。

リトミックあそび指導案

9:15～10:00 於：つき組保育室

指導者 高井正恵
園山恵理子

1. 年齢：5歳児（つき組）
2. あそび設定の視点：イメージの世界で音楽的能力を高めていく表現活動
3. 主 題：音楽王国からの挑戦状
4. 主題について

子ども達は、イメージの中で遊ぶことが大好きである。今回は音楽王国から挑戦状が届いたという場面設定をすることにより、イメージを広げ、さらに音の聞き分けを通して表現力を伸ばしていきたい。

5. 園児の様子

年長になり、日々の取り組みにおいて、ますます意欲面が向上してきている。自由あそびでも自分の好きなあそびを見つけ友だちと活発に遊んだり、鉄棒や縄跳び等、技術的なことに積極的にチャレンジする姿が見られるようになった。リトミックあそびにおいては、年少・年中での経験を基に、更に活動の内容を深めているところである。

6. 本時のねらい

イメージの世界で友だちと一緒に問題を考えていく中で、拍子や休符・音のニュアンスを感覚的に捉えていかれるよう、豊かな感性を伸ばしていきたい。

7. 本時の指導過程

*最初に2つ（知能あそび・リトミックあそび）の活動内容を子ども達に説明して選択させる。

時間：9:00～9:15 場所：幼稚園ホール

教材の内容及び活動	指導上の留意点
～準備：裸足・円になる～ 1. リトミックあそびのうた、あいさつ	○空間を広く使えるよう、環境作りをする。 T1：全体を通してピアノを中心に活動を進めていく。 T2：子ども達と一緒に活動し、様子を見ながら適宜援助していく。 ○これから活動を始める意識を持たせるようにする。

2. お返事はいい

先生「○○くん」→子ども「はあい」

3. 「音楽王国からの挑戦状」

音楽王国の王様から挑戦状が届きました。そこには、『3つの問題に答えられるか』と。さて、聖徳幼稚園の子ども達は問題がクリアできるのでしょいか？

① 手紙を読む。

② 謎のうたを歌う。

～ウォーミングアップ～

「♪」…歩く 「♪」…ゆっくり歩く

「♪♪」…駆け足 「♪♪」…スキップ

(合図)

☆高い音…頭の上で手をたたく。

☆低い音…しゃがんで床をたたく。

☆高低同時…片手を上に、もう片手は床をたたく。

☆リズム “♪♪♪♪♪|。♪” …アクセントで手をたたく。

☆呼びかけ “ヨロシクネ” …友だちを見つけて握手する。

③ 3つの問題を解く。

・本の指示に従って、順番に考えていく。

★第一の問題：何拍子？

うたを歌って何拍子なのか考える。

★第二の問題：エレベーター～どんな感じ？

『うれしいな』or『かなしいな』どちらの音か当てる。

★第三の問題：友だちさがし

～休符はいくつ？

・友だちと一緒に考える。

4. 終わりのあいさつ

○出席確認及び本日の健康状態把握も含め、子どもに呼びかける。

○きちんと音に合わせて答えられるよう配慮する。

T2：お話をじっくり聞けるような雰囲気作りをする。

T1：子ども達のイメージが広がっていかれるよう、話を進める。

T1：即時反応の合図を子ども達にわかりやすいように伝える。子どもの動きを見て合図を出すタイミングを工夫する。

T2：なかなか取り組めない子どもがいたら励ましたり、一緒に行く。

T2：反応の速い子どもを認めていく。

T1：テンポを変えていきながら、タイミングをつかませるようにする。

○友だちは何人でもよいという指示をする。

T1・T2：子ども達の意見を取り入れながら進めていく。

T1：拍子に気づけるように弾く。

T2：音の高さをはっきり表せるようにする。

T2：円になり、全員の気持ちを合わせられるよう、集中して音を聴くようにする。

T1：友だちが見つけられるよう声かけする。

T2：見つけられない子どもの援助をする。

T1：休符が見つけやすいように弾く。

○本時の活動を振り返り、次回にも期待が持てるようにする。

8. 評価

活動後、本時の内容を振り返り、子ども達一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し、本時のねらいが達成できたかどうかまとめ、次回へとつなげる。

小 学 校 の 部

国語科学習指導案

9：15～10：15 於：はまかぜ組教室

指導者 渡辺 泰介

1. クラス名：はまかぜ組（1年生）

男子 23 名 女子 12 名 計 35 名 聖徳式（個人）平均 IQ 141.2

2. 授業設定の視点：一人ひとりの個性（興味・関心）に応じた学習指導

3. 教材：『音感語』～擬声・擬態語～

4. 目標：二音のくり返しによるイメージを言語化する

5. 教材設定の理由

(1) 教材観・指導観

日本語という言語の主に表現を見る時、一般に言われるオノマトペ（擬声語・擬態語）の種類が多さ、その豊かさは特筆すべきものであろう。明治大学文学部教授の小野正弘氏は、著書『オノマトペがあるから日本語は楽しい』（平凡社新書 2009 年）の中で次のように言っている。

言葉のおおもととなるようなもの。言葉の発せられる現場で、口伝えに受け継がれてきたもの。肉体感覚や心の感覚を表そうとしたとき、ないと困るもの。ふだんはよく認識して使っているわけではないけれども、よくよく思いを巡らせてみると、自分たちの用いている日本語の中に深く根を下ろしているもの…これなのではないだろうか。（p.11）

「言葉のおおもと」という感覚は興味深いが、少なくとも日本語からこのオノマトペを除いてしまうと、ずいぶんと寂しい表現になってしまうのではないだろうか。この指導案を書いている時の私の「ドキドキ」も、児童の反応を考える時の「ワクワク」も、どのように表現してよいかわからなくなってしまう。

本校ではこのオノマトペを「音感語」として一年生から指導している。オノマトペが文字文化を持つ以前の、口承の表現であることから「音を感じる」というこの名称は実に的確だと言えるのではないだろうか。児童は、言葉と同時にイメージを学ぶ。「くるくる」は渦巻のような形を、「ころころ」は坂を転がるようなイメージが、言葉にくっついていること感覚的に理解するのである。私たちの耳は、音声とイメージを結び付けて捉えていると考えられる。例えば、「めらめら」は物が燃える様子を表した音であるとして、概念的に「めらめら」に習熟するのではなく、「めらめら」という音に、物が燃える感じ、印象をくっつけているのだと考えられる。

この授業では、これまで学習してきた音感語（とくに二音のくり返し）のいくつかを視覚的に再確認したのち、『たべもの』という詩を使って、児童にとって身近な食べ物に関する音感語を整理してみたい。「かりかり」や「しゃきしゃき」といった歯ごたえをイメージさせるものや、「ほかほか」「あつあつ」などの温度をイメージさせるもの、「ぷりんぷりん」「びんびん」といった素材の新

鮮さをイメージさせるものなど、児童からの発言に期待したい。さらに、自分の好きな食べ物について、音感語を使って表現させたいと考える。

（2）児童観

小学校に入学して二か月、本校独自の授業スタイルにも徐々に慣れ、それぞれが個性を発揮しつつある。一年生の語彙量は、家庭環境や幼稚園など入学前の生活によって様々だが、その広がりには授業でも日々感じられる。もちろん、同じものを見ての印象を、すぐに言葉（音声）に置き換えられる児童と、なかなかできない児童が存在するが、後者に属する児童であっても、友達の意見を耳にする中で、多くの刺激を受けているものと思われる。今回のテーマ「音感語」については、四月、五月とステップを踏んで扱ってきた。一年生と言えど、すでに多くの語彙を生活の中で使っているわけだが、それを整理し、再認識する過程であらためて擬声語・擬態語の面白さ、広がり豊かななどを体感してほしいと考えている。

【知能構造のプロフィールークラス平均—】

知能指数	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
141.2	144.9	136.1	142.6	140.1	151.3	135.3	138.4	140.7

6. 指導計画

- 音感語を使い、視覚と音声の照合を行なう。…1、2校時
- 音感語を使い、行動と音声の照合を行なう。…3、4校時
- 音感語を使い、イメージを言語化させる。…5校時（本時）

7. 本時の目標

二音のくり返しによる音感語を分類し言語化する。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点および留意点
①音感語の復習	<ul style="list-style-type: none"> ●授業開始の挨拶をする。 ●素読読本第壱輯を音読する。 ○既習の音感語を視覚的に振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ●授業の構えをつくる。 ○音声とイメージが理解できているか。
②音感語の抽出	<ul style="list-style-type: none"> ○詩『たべもの』を音読しながら音感語を抽出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○音感語に着目できているか。
③音感語の分類	<ul style="list-style-type: none"> ○抽出した音感語を児童の言葉で整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○感覚を言葉にできているか。

<p>④イメージの言語化</p>	<p>○好きな食べ物を選び、それに加える音感語を自ら考える。</p>	<p>○イメージした感覚を音感語として表現できているか。</p>
<p>⑤まとめと発表</p>	<p>○できあがった児童に発表させ、その印象を聞く。</p> <p>●授業終了の挨拶をする。</p>	<p>○イメージが的確に言語化できたか。</p>

9. 評価

自分のイメージをどれだけ音感語にできたか。

知能訓練指導案

9:15 ~ 10:15 於: わかしお組教室

指導者 砂 廣 芳 子
渡 邊 孝 典

1. クラス名: わかしお組 (1年生)

男子 22 名 女子 12 名 計 34 名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 141.5

2. 授業設定の視点: パズルを通して創造的知能の開発と育成を目指した指導

3. 教材: 『モザイクパズル』 ~透明ピースの置き方を柔軟に考えよう!~

4. 本時刺激される知能因子: 図形で転換を集中思考する (NFT)

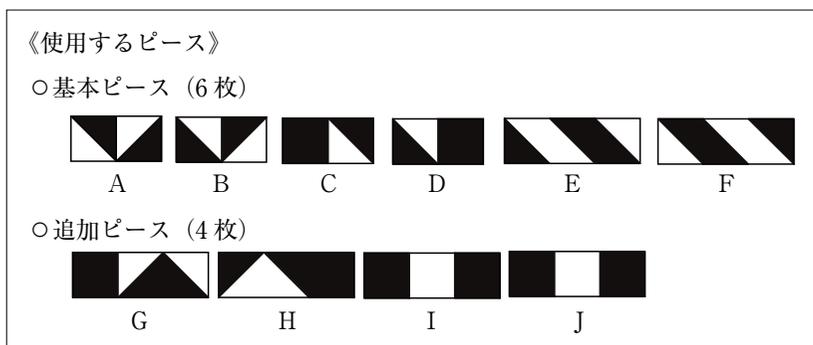
5. 本時のねらい

2つの図形が組み合わされてできたピースの置き方を柔軟に考え、転換力や推理力を働かせて提示された形を完成させることにより、図形で転換を集中思考する力を育てる。

6. 教材について

本教材で刺激される知能因子は、複雑な図形の構成の中から、その中に含まれている一定の図形を発見する能力であり、例えば、夜空の多数の星から北斗七星という星列を発見するなど、さまざまな星列 (星座) を見つけていく能力のことである。夜空の無数の星からある星列を発見する場合、「星座の本」の通りではない。星を見る場所、方向、方角など、異なる条件の中、見ていかなくてはならない。それは、それぞれに頭の切り替えが必要になり、こうした切り替えが、転換の集中思考となる。

本時の『モザイクパズル』は、上記の考え方を活かしたパズル版である。パズルに使用するピースは、透明板に基本図形の三角形  を組み合わせて出来た正方形 、平行四辺形 、大きな三角形  を青く塗りつぶしており、ピースの組み合わせ方によって様々な形を構成することが出来る。(図1)

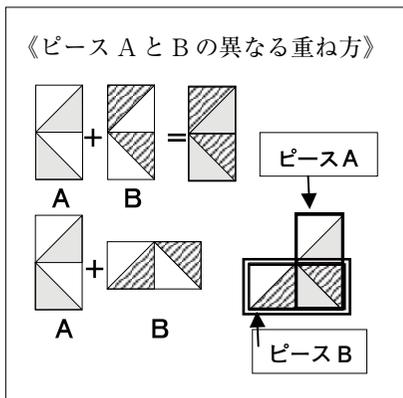


(図1)

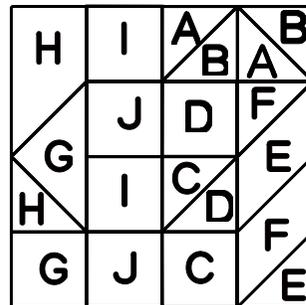
この青い形が描かれたピースを全て使って、オレンジ色に塗りつぶされた見本の形の上に重ねて、青い色の同じ形を作っていく。解き進めるには、ピースの図形構成と透明部分を上手に活かし、表裏に注意を払いながら置かなければ完成することが出来ない。それらの点が大きなポイントとなり、転換の集中思考が大きく必要になってくる。

本時で行う『モザイクパズル』は、本校で独自に作成した教材であり、ピースは透明板に色工作用紙を貼り、作成していた。

今回の使用にあたって、ピースの素材、構成を見直し、新たな素材でピース作成をした。ピースは同じ2枚でも、異なる重ね方によって全く違う図形を作ることが出来る。(図2) そして、最後、10枚全てのピースを合わせると、4×4の「正方形」になる。(図3)



(図2)



(図3)

これは、「清少納言知恵の板」や「セブンピースパズル」、「タングラム」等のパズルピースが、ある一定の比率でピース分割することを参考にした。

また、課題については、それぞれのピースの特性を押さえたうえで、徐々に難易度を上げながら解く楽しさを味わえるように、作成した。出来上がる形も児童の興味を引くように、漢字であったり、ロケット、うさぎ等、具体的な形に見立ててある。

「次はうさぎに挑戦だ!」

など、元気で意欲的に取り組む様子が目に浮かぶ。それぞれが、考えることを楽しみながら、目を輝かせ、次々に問題に挑戦することを期待したい。

7. クラスの実態と指導の視点

4月にはあどけない表情のわかしお組の児童も徐々に学校生活にも慣れ、小学生としての自覚を持ち、クラスの集団の中で一人ひとりが自分らしさを出せるようになってきた。普段90分授業の知能訓練においても、積極的な発言や質問をしながら、自分なりに努力して取り組んでいる。また、どの課題にも興味を持ち、難題に対しても果敢に向かう姿勢は頼もしい限りである。その反面、自分自身の解答に自信が持てず、確認を求めがちな児童もいる。

本時に扱うパズル形式の課題は、児童の挑戦意欲を掻き立て、意欲的な取り組みが予想される。のびのびと柔軟に思考を働かせ、パズルの楽しさを味わって欲しい。一方、転換という高度な思考

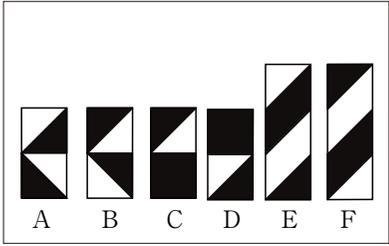
を要する課題でもあるので、考え方を切り替えられずに行き詰ってしまうことも同時に考えられる。なかなか視点を切り替えていくことが困難な児童には、適宜、次の段階に進めていくことが出来るような助言を与えていきたい。そのためにも、二人指導制の良い面を活かして、個々の実態を的確に把握し、それぞれが自己のペースで楽しみながらじっくりと取り組んでいけるよう進めていきたいと考える。また、担当の一人はクラス担任でもあるので、普段のクラスでの様子も考慮しつつ指導にあたりたい。

わかしお組の知能指数（IQ）及び知能因子指数平均は下表を参照

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
141.5	149.1	137.6	137.6	140.1	151.9	137.8	136.9	141.0

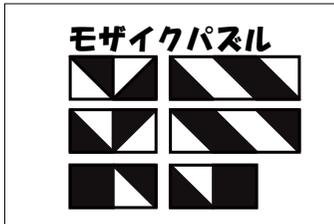
本時に刺激する「図形」の平均FQは、他の知能因子指数に比べて高い数値を示しており、興味関心が強い児童が多い課題の1つと言える。特にパズルという課題は幼少の頃から遊びとしてなじみがあり、熱心に取り組むことが予想される。一方で、「集中思考」の平均FQは、他の知能因子指数に比べてやや低い数値を示している。視覚的にも何をすべきか理解できても、いざ課題に入った際に形の構成に迷うことも予想される。できた時の喜びを次へとつなげていけるよう励ましながら、最大限の力を発揮できるように環境を整えたい。また、後半難問が出てきた場合にも、落ち着いて順を追って考えていく粘り強さを大切に、きめ細やかな指導にあたっていければと思う。

8. 本時の指導過程

教材の内容及び学習内容	指導上の留意点
<p>1. 挨拶・出席確認</p> <p>2. 導入</p> <p>○提示を見ながら指導者の説明を聞き、本時の活動内容を理解する。</p> <p>《基本ピース》</p>  <p>※B、D、Fは裏返したり、回転させるとA、C、Eと同じ図形構成になっている。</p>	<p>・本日の健康状態も把握する。</p> <p>T1・T2：各自に個別冊子A、基本のパズルピースの袋を配布する。</p> <p>T1：机間巡視をしながら個々の様子を観察し、必要に応じて個別に対応する。</p>

- 個別冊子Aの表紙に袋の中のピースを重ねて、どんなピースが入っているか確認する。

《個別冊子Aの表紙》



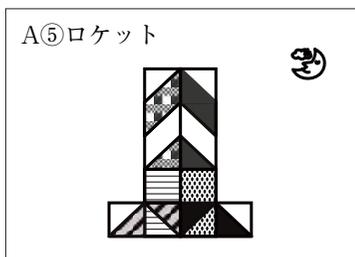
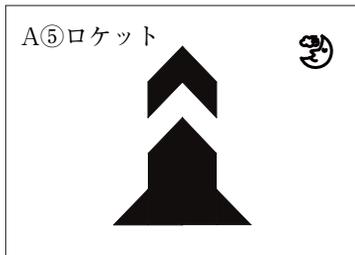
- いろいろなピースの重ね方を、操作し、どんな図形が出来るか考え、発表する。

- パズルは、ピースを全て使用することを理解する。

- 3. 進度表に名前を記入し、基本ピースで個別冊子Aに取り組む。

1題ずつ完成出来たら指導者に確認をとり、次に進む。

《個別冊子A問題と解答》



T1：教示用の大判提示を用意し、提示しながらピース内容を確認させる。

児童には、個別冊子Aの表紙に袋の中のピースを重ねて、使用するピースが揃っているか確認させる。

T1：ピースを重ねると正方形や三角形等が出来ることに気づかせ、発表させる。

注意事項があることも伝える。

T1：実際にパズルを行う際には、ピースは全て使用することを伝える。

T1・T2：各自に進度表を配布し、名前を記入するように伝える。

個別冊子A（10題）をピース全て使用して取り組ませる。

T1・T2：問題を完成出来た児童の進度表にチェックをし、次に取り組ませる。

指導者2人は対角線状に個別指導にあたり、全体を見渡すように配慮する。

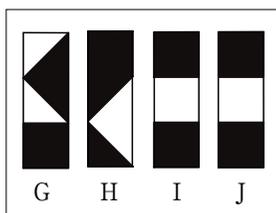
《個別指導の助言ポイント》

- ① {
 - 透明部分と青い部分の重なり注意到意して取り組んでいるか。
 - ピースを表裏で試してみたか。

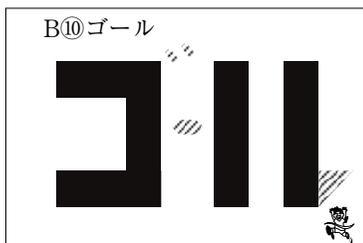
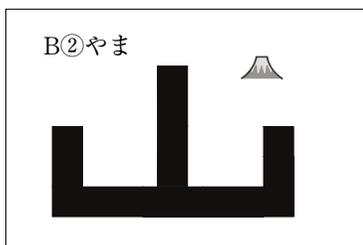
など

4. 個別冊子Aが全て終了した児童から、個別冊子Aを片付け、個別冊子Bと追加ピース4枚を受け取り、合計10枚で個別冊子Bに取り組む。

《追加ピース》



- 個別の活動に取り組む。



5. まとめ

使用した用具を片付け、今日のパズルの感想を述べる。

T 1：個別冊子Aが全て終了した児童に、個別冊子Aと引き換えに冊子Bと追加ピースを渡し、個別冊子Bに進ませる。

T 1・T 2：個別冊子Bに進む場合、ピースが10枚になるので煩雑にならないように呼び掛ける。

T 1・T 2：机間巡視をしながら、思考が滞ったままの児童がでないように適切な指導を心がける。

《個別指導の助言ポイント》

〈気持ちの面で躓いている児童に向けて〉

- 出来ていた所を褒め、気持ちが持続出来るよう励ます。
- 出来ている部分を固定し、再考するように促す。

〈課題に躓いている児童に向けて〉

助言ポイント①に加え、以下を助言する。

- ピースが10枚、全てあるか。
- 青い部分が重なりすぎていないか。

上記の助言でも難しい場合は、一部ピースを固定し、取り組ませる。

T 2：使用した用具を片付ける。

T 1：児童の感想を聞き、褒め、本時の課題がねらいを達成できたかどうかの判断材料とする。

9. 評価

授業後、本時を振り返り、子どもたち一人ひとりの課題への取り組みや反応（意欲・集中力・理解度）について、指導者同士で確認し、本時のねらいが達成できたかどうか実践記録にまとめて今後の実践に活かす。

知能訓練指導案

9:15～10:15 於：あずさ組教室

指導者 地 挽 裕 子
谷 口 優

1. クラス名：あずさ組 (2年生)

男子 22 名 女子 11 名 計 33 名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 138.5

2. 授業設定の視点：ゲームを通して柔軟な思考の育成を目指した学習指導

3. 教材：『宝とり双六』

4. 本時刺激される知能因子：記号で見通しを拡散思考する (DSI)

5. 本時のねらい

2つのサイコロの目の数をうまく使って駒を動かし宝をとって自陣に運んでくる。更に、この時の相手の動きを見ながら効率的な駒の動かし方を柔軟に考えながらゲームを行う事により、記号で見通しを拡散思考する能力を育てる。

6. 教材について

子どもたちが大好きな遊びの中に、サイコロを振って、その目の数にしたがって駒を動かす双六遊びがある。また、この双六を発展させて、大人まで楽しめるゲームとして親しまれているものの中にバックギャモンがある。

バックギャモンとは、2つのサイコロを振り、その目数に従って駒を1つずつ、あるいは両方の目の合計数の分だけ持ち駒 (複数) を相手のゴールに向けて移動させて、相手より先に持ち駒を全てゴールさせれば勝ちとなるゲームである。自分のスタート地点の反対方向から進んでくる駒の動きを見ながら、自分にとって有利になるように2つのサイコロの目の数を工夫して駒の動かし方を考えるのである。

特殊なルールとして、「ブロック」といって、ゲーム盤の1つのマス目の中に、2つ以上の駒が入っている場合には相手の駒がそのマス目に入ることができなくなるものと、「ヒット」という、単独でいる時に相手の駒がそのマス目に丁度入った場合には、その駒は除かれてしまうものがある。このようなルールがある為に、サイコロを振って単に駒をゴールさせる双六にはない面白さがバックギャモンにはある。

本時に行うゲームはこのバックギャモンの動きを基にして、更にゲーム性を高めるために宝とりの要素も取り入れたものである。この事により、駒を動かす方向も一方向にとどまらなくなるため、ゲームを有利に進めていくためには高度な見通し力が必要になってくる。また、盤の中央には自分の駒しか止まる事のできない「安全地帯」も設けたので、相手の駒との駆け引きもより一層活発になる事が予想される。

また、効率よく駒を進め、早く全ての宝を自分の陣地に運び込むための有利な手を考える際には、計算を流暢に思い浮かべる柔軟な思考力も必要となってくる。

このゲームを通して、相手の動きを見ながら柔軟に考えながらゲームを行い、駆け引きをしていく過程の楽しさを味わいつつ、創造的知能を高めていければと思う。

7. クラスの実態と指導の観点

どのような課題に対してもむらなく興味関心があり、集団としても児童それぞれも反応が素直である。自分にとって簡単な課題であっても一生懸命取り組み、逆に難しいものでも諦めずに取り組む姿勢を見せている。先日取り組んだプリント形式の課題にも「このまま、あと5時間位やってほしい!」と言っていた姿が印象的であった。一方で、話を聞く構えや、どれだけ理解できているかは差が大きく、集中して取り組んでいる児童でも説明の理解が自分なりで全体と異なる進め方になっている児童が点在している場合がある。個別の思考の様子を指導者が机間巡視で丁寧にしながら、考え違いしたままに進める事がないかを、細かく見る必要がある。

《知能構造（クラス平均）のプロフィール》

	IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散	集中	評価
平均	138.5	147.1	134.1	134.4	131.7	142.6	136.2	142.9	139.0

本時に刺激する『拡散思考』平均 FQ136.2（知能因子指数）や『記号』平均 FQ134.1（知能因子指数）は、数値の上では得意とはいええないものの、ゲームはこのクラスの児童たちが大好きな課題なので活発な思考の様子が予想される。ゲームといったみんな楽しく取り組める形式を用いる中で、考える楽しさを味わって欲しいと考えている。

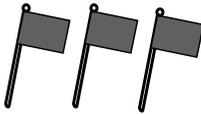
8. 本時の指導過程

教材の内容及び学習活動	指導上の留意点
<p>導入</p> <ul style="list-style-type: none"> 指導者の話を聞き、本時の内容を理解する。 <p>◎ゲーム盤 2人で1枚</p>	<ul style="list-style-type: none"> T1：黒板に説明用ゲーム盤を提示し、わかり易く説明していく。 T2：机間巡視をしながら、子どもが説明に集中できているか確認する。 <p>* 青（赤）の安全地帯、及び宝置き場には、赤（青）の駒は止まる事ができない。</p>

- ◎駒 1人3個…スタート位置はそれぞれの陣地



- ◎宝の旗 1人3本…それぞれの宝置き場に置いておく



- ◎サイコロ 2個…1～6までのもの
1～3がそれぞれ2面ずつあるもの



《ゲームの進め方》

- ◎全ての宝を速やかに自分の陣地に運ぶための方法を工夫して考えさせるゲーム

- ① 2人 (1対1) で対戦する。
- ② じゃんけんをして、赤・青を決める。
- ③ 先攻の人から2つのサイコロを同時に振る。
- ④ サイコロの目の数により、宝置き場を目指して駒を動かす。この場合、2つのサイコロの目で四則計算をして、その和・差・積・商のいずれかの数分だけ1つ駒を動かしても良いし、2つの駒をそれぞれの目の数に従って別々に動かしてもよい。

《 と  が出た場合》

- ◎ 1つの駒を動かす方法
- | | |
|--|---------------|
| $\left. \begin{array}{l} 2 + 6 = 8 \\ 6 - 2 = 4 \\ 2 \times 6 = 12 \\ 6 \div 3 = 2 \end{array} \right\}$ | のいずれかの数分動かせる。 |
|--|---------------|

- T1：スムーズにゲームが行える様ように、ゲームの目的をしっかりと理解させる。

- T1・T2：2人で模擬的にゲームを行いながら、具体的にわかり易く説明する。

- T1：駒の動かし方のきまりを、ポイントをおさえて把握させる。

- ゲームの流れに応じて、より有利な駒運びの方法を、柔軟に考えられる様にする。

◎2つの駒を動かす方法

1つは2、もうひとつは6動かせる。

⑤同様にして後攻の人も駒を動かす。

⑥宝置き場で駒を捕ったら、自分の陣地に戻ってくる。

- 宝置き場へは、丁度の数でないと入ることができない。

- 陣地に戻る際も丁度の数でないといけない。

数が多い時には、別の駒を動かすか、パスしなければならない。

⑦全ての宝を先に自分の陣地へ運んだ方が勝ちとなる。

〈ルール〉

◎ヒット

相手の駒が1つしか置いていないマス目に止まった場合、「ヒット」といって、その駒を相手の陣地に戻す事ができる。ただし、その駒が宝を持っている場合には、駒のみ戻し、宝は宝置き場へ戻すことになる。

◎ブロック

自分の駒が1つのマスに2個以上入っている場合、これを「ブロック」といって、そこには相手の駒は止まる事ができない。ただし、通り抜ける事はできる。

2. 二人ずつ机を合わせてゲームを行う。

- 各グループにゲーム盤、駒、サイコロ2種、宝を用意しゲームを進める。

3. まとめをする。

- 各グループでゲームに使用した用具を片付け本時の感想を考える。

- より早く宝を自分の陣地へ運ぶための方法を、柔軟に考えて判断させる様にする。

- 相手の駒の動きを妨害するにはどうする事が有利になるのかを考えさせる。

- 単独でいる相手の駒をヒットできる駒運びを思いつかせる様にする。

- 相手にヒットされない様にするにはどのようにするのが良いのかを考えさせる。

- 駒を1マスに2つ以上入る様な動かし形を色々思い浮かべ、より効率的に駒を動かせる様にさせる。

- T1・T2：各グループの進行状況を見ながらルールが理解されているかどうか確認する。

- T1・T2：理解が不十分な場合には適宜指導助言を与える。

9. 児童の取り組み（理解や工夫）と課題の内容を2人の指導者で分析し、実践記録としてまとめ、今後の実践に活かす。

数学科学習指導案

9:15～10:15 於：やくも組教室

指導者 松 崎 昭 彦
木 村 美 樹

1. クラス名：やくも組 (2年生)

男子 21 名 女子 11 名 計 32 名 聖徳式 (個人) 平均 IQ140.8

2. 授業設定の視点：ゲームを通して創造的知能の育成を目指した指導

3. 授業の題目：「三山くずし」～必勝法を考えよう～

4. 題目について

子どもたちはゲームが大好きである。これまでの数学の授業の中でも、かけ算のビンゴゲームをしたり、面積の陣取りゲームをしたりしてきた。ゲームは勝ち負けやゴールがはっきりしていることで、楽しみながら意欲的に取り組むことができる。そしてその中で考える力を養い、単元の内容に習熟させることをねらいとしてきた。

今回は「三山くずし」に取り組むなかで、このゲームのもつおもしろさを味わいながら、先を見通して考えさせていく。相手の取り方をさまざまに予測する中で、より有効な自分の手が見つかるはずである。さらにそこから「こういうパターンにもって行けば必ず勝てる」という『必勝法』を発見しようとする意欲を導きたいと思う。

最終盤の局面になると、すでに勝敗の行方ははっきりしてくる。そこからいくつかの必勝パターンに気づき、整理しながら逆にたどって行くことで、事象を順序よく場合分けしていく力、論理的に考える力を養っていきたい。

5. クラスの実態

昨年度からの持ち上がりクラスであり、教員と子ども、また子ども同士もお互いによくわかりあっている。クラス全体として、学習に対する意欲は高く、日々の授業に楽しく取り組むことができている。昨年度から、「友達の意見や考えを大切にすること」「まちがいや失敗を恐れずに発言すること」の2点を意識して指導してきた。考える力や集中力には個人差があるものの、積極的に自分の考えをまわりに伝え、それを共有しようとする姿勢は、おおいに認められる。本時の授業でも「どうすれば勝てるか」という意欲を高め、色々な角度から児童の考えを引き出していきたい。

児童によっては、ルールを理解するために時間を要することがある。その場合には、二人指導制を活かして個々に対応し、全ての児童がゲームを楽しみながら、学習内容を深めていくことができるようにしていく。

尚、本クラスのIQ (知能指数) とFQ (知能因子指数) は下記の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
140.8	146.3	131.9	144.1	134.1	143.5	141.0	142.3	142.9

6. 指導計画 (1時間扱い)

「三山くずし」～必勝法を考えよう～……1時間 (本時)

7. 本時のねらい

ルールを正確に理解し、何手か先を考えながらゲームを行うなかで、自分なりに必勝法を考えることができる。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
1 三山くずしのルールを理解させる。	<ul style="list-style-type: none"> • 黒板での教員の対戦を見ながらルールを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 同じパターンで勝負がつかないようにする。
2 ゲームを行い勝負のつくパターンを考えさせる。	<ul style="list-style-type: none"> • 2人ずつ組になり、三山くずしを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> • ルールを守って楽しく対戦させる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>《三山くずしのルール》</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 碁石を2個・3個・4個の3つの山に並べる。 ② ジャンケンで先攻後攻を決め、先攻から石をとる。 ③ 石はどの山から取っても良いし、何個取っても良いが、一度に取ることのできるのは1つの山からだけである。 ④ 自分の番がきたら必ず取らなければならない。 ⑤ 最後の石を取った方が負けである。 </div>		
3 どうやったら勝てるか、気づかせる。	<ul style="list-style-type: none"> • 教員と対戦する。 • どういうパターンになったら勝負が決まるのかを考える。 • 発見した必勝法を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 途中で結果を予測する児童のつぶやきを取り上げ、必勝法に結び付ける。 • 理解できていない児童には、個別に声をかける。
4 条件を変えた中で必勝法を考えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> • 碁石や山の数をかえてゲームを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> • これまでの学習をもとに、粘り強く考えられるよう、助言や声かけを行う。

地理科学習指導案

9:15 ~ 10:15 於つばさ組教室

指導者 齊 藤 勇

1. クラス名：つばさ組 (3年生)

男子 22名 女子 10名 計 32名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 154.9

2. 授業設定の視点：様々な道案内を考え、創造的知能の開発と育成を目指す

3. 主題：地図記号と地図

4. 主題について

本校では2・3・4・5年生で地理の学習をおこなう。その主な内容は次のとおりである。

2年生 「視点の転換 (前から見ると・上から見ると)、鳥瞰図の視点 (学校から武蔵境までの地図)、空間の連続性 (川の絵巻物)」 ⇒※年間10時間行う。

3年生 「方位、地図記号、地図帳、統計資料、縮図、等高線」

4年生 「地図と地球儀、二万五千分の一地形図、日本の地形・気候・人口」

5年生 「日本の農業・水産業・工業、世界の中の日本」

2年生～4年生前半では、「空間的な広がり」をつかませるために、さまざまな角度から地理的事象を眺め、思考させる。そして4年生後半から5年生にかけて、自然環境を広い視野から捉え、人間生活との関係、地域相互の関係を考察し、処理する能力と態度を育成していく。系統だった力をつけさせるためにも、3年生では「地理の勉強は楽しい!」と感じさせることが大切だと考えている。

この主題では、八方位や左右、地図記号を利用して地図の中を自由に動き回ることをねらいとしている。今までの学習から、子ども達が「北にまっすぐ進み、2つ目の十字路にぶつかったら東に進む。」というように東西南北の方位を使って動いたり、また「3つ目の交差点を左に曲がり、突き当たりを左に進む」というように地図の中に入り込み左右を用いて道順を考えたりすることが予想される。さらに「病院のある角を左に曲がり、まっすぐ進んで寺院のある角を西に進む。」など地図記号や建物に着目して考えることも考えられる。地図を外から見た視点と、地図の中に入った視点の、2つの視点を上手に使い分けられるように指導していきたい。

5. クラスの実態

今年から本格的に始まった地理の学習を、子どもたちは楽しみにしている。既習事項だけにとどまらず、地図帳を眺めながら「ゴールデンウィークに旅行で訪れた場所は、何県にあるのだろう?」「地域限定のお菓子を発売している都道府県の場所は?」などと進んで色々なことを調べている。

クラス全体では元気で活発な児童が多く、積極的に意見を述べることができる。挙手が多いた

め、話し合いの活動も充実したものとなる。現在は、発言のルールがさらにしっかりと守れるように指導している。

本クラスのIQとFQ（知能因子指数）の平均は、以下の通りになっている。本時の授業では、「図形」や「拡散思考」を刺激していく。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
154.9	164.3	149.3	151.2	150.4	156.7	157.9	165.1	144.5

6. 指導計画

- (1) 地図記号…………… (6校時)
 (2) 地図の読み取り…………… (7校時中本時は4校時目)

7. 本時の主題：地図遊び

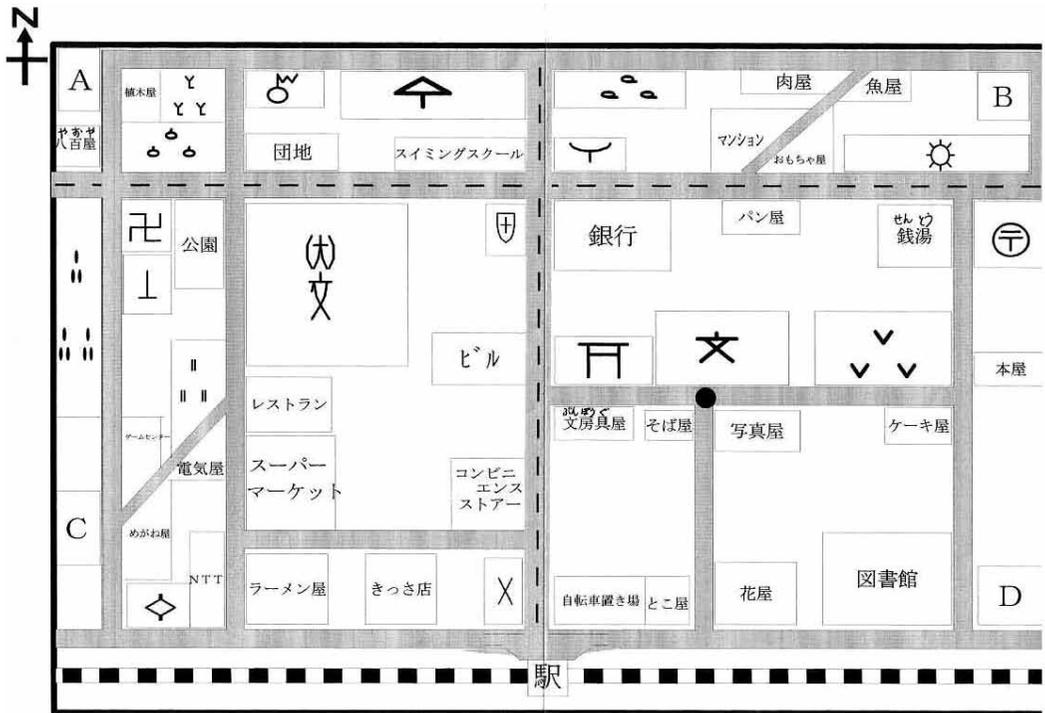
8. 本時のねらい

地図の中での位置関係を把握させ、八方位や左右・地図記号を用いながら色々な道順を考えさせる。

9. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
1. 地図の全体像を捉えさせる。	地図を見ながら、道の位置やどのような建物があるのかを確認する。	地図を実物投影機で拡大し、スクリーンを見ながら一斉に確認する。 物語風に仕立て、子ども達が地図の世界に入り込めるように場面設定を工夫する。 位置だけでなく、向きにも注意させる。
2. 地図中の位置関係を把握させ、道順を考えさせる。	地図中の指定したいくつかの場所までの道順を発見して、ワークシートに書く。 その後、自分の考えた道順を発表し、検討していく。	方位や地図記号を用いるように助言する。 方位と左右で表した場合には、どちらがわかりやすいのかを比較させる。 たどりつけない場合は、どこで間違えたのかを考えさせる。

《本時で使用する地図》



英語科学習指導案

9:15 ~ 10:15 於:みずほ組教室

指導者 明 石 この実

1. クラス名:みずほ I 組 (3 年生)

男子 12 名 女子 4 名 計 16 名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 154.5

2. 授業設定の視点:一人ひとりの個性や興味・関心、能力に応じた英語学習

三年生から始まる英語学習は、各ホームルームクラスを二つのグループに分け、1 グループ約 16 人で行われる。この少人数での授業展開は、より多く聴き、話すことが大切という教科の特性を踏まえ、45 分の授業の中で子ども一人ひとりに多くの練習・発言の機会を与えている。三年生になって初めて英語に触れた子だけでなく、既に英語に触れたことのある子も若干名いる。しかし、事前の知識に関らず、クラスルームで一緒に学び合うのは「楽しい」ということが、子どもたちの様子から伝わってくる。さまざまな繰り返し練習やゲームを通じ、それぞれの子がお互いの興味・関心、能力に応じ、影響し合って力を伸ばしている。

3. 授業のテーマ:“At the Zoo”(動物園で)

4. テーマについて

今回の題目(テーマ)「At the Zoo」は、4、5 月にテーマとした「In the Classroom」に続く二つ目の単元である。前単元では、「数字」「曜日」「天気」「あいさつ表現」「教室の中の語彙」などを歌や動作、ゲームを通して学んだ。その基本的な語彙や表現を踏まえた上で、今回のテーマを学習していく。

「At the Zoo」は、「動物の名称」に親しむことを中心とした単元である。絵カードを使った基本的な練習の他に、絵本『Brown Bear, Brown Bear, What do you see?』(エリック・カール作)を用い、その読み聞かせも取り入れる。そして最終的には、全文の暗唱に取り組む。さらには動物の特徴を「色」や「大きさ」などで表現することにも発展させたい。ここで「色の名称」、short、long、big、small などの「簡単な形容詞」についても触れることになる。

その他「体の部位名」を歌「Head, Shoulder, Knees and Toes」「One Little Finger」に合わせて、触れたり指さしたりしながら覚える。いずれも子どもたちの大好きな曲である。アルファベット(大文字)の学習も本単元より入る。文字を見てその名称が言えるように、順番を替えたり、点つなぎをしたりして繰り返し触れさせ、定着を図る。

また、単元ごとに少しずつ「対話表現」も取り入れている。二枚で対応するようになっている絵カードを用い、「Are you ready?-Not, yet.」「Hurry up!-Wait!」「How are you doing?-Pretty good!」などの表現を学ぶ。実際にゲームや日常の活動の中で、自然とこのような言葉が子どもたちから出てくることも多々あるのが興味深いところである。

授業はほぼ英語のみで行っている。しかし、想定しているのは英語に初めて触れる段階の児童である。英語を聞き、そこから意味を直接感覚で獲得できるように指示の出し方の工夫も考えていきたい。

5. クラスの実態

この四月に英語の授業が始まったばかりの3年生は、新しい教科である「英語」に強い関心と意欲を持って取り組んでいる。「家族の誰かが英語が話せるので、自分もそうになりたい」という子や、「授業内で歌う歌が好き」という子、ゲーム的活動に熱中する子など、一時間一時間の授業をとっても楽しみにしている様子である。繰り返しの練習にも臆せず元気な声で応じるので、その定着も早い。この発達段階の子どもたちは、とりわけ音に敏感で、模倣を繰り返すうちに自然と英語らしい発音やイントネーションを身に付けていくのも大変興味深い。

6. 目 標

- ① 歌や表現の口頭練習を通して、英語特有のリズムに慣れる。
- ② 動物の名称、色、体の部位名、アルファベットの大文字を身に着ける。
- ③ 様々なゲームや活動を通して、英語で話すことの楽しさや話せたことへの達成感を持つ。

7. 本時の指導過程

ね ら い	学 習 活 動	指導の重点および留意点
あいさつ	<ol style="list-style-type: none"> 1 挨拶をする。 2 天気、日付、時刻等を確認する。 3 歌を歌う。 	<ul style="list-style-type: none"> • 元気に大きな声で発音されているか。
アルファベットの練習	<ol style="list-style-type: none"> 4 アルファベットの大文字を歌やゲームを通して練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 定着しているか。
動物の語彙や特徴を学ぶ	<ol style="list-style-type: none"> 5 動物の名前、体の部位などを練習する。 6 絵本を使った口頭練習、ゲーム的活動をする。 	<ul style="list-style-type: none"> • 正確な発音で読めているか。 • 友達の英語にもしっかり耳を傾けているか。
まとめ	<ol style="list-style-type: none"> 7 挨拶をする。 	

英語科学習指導案

9：15～10：15 於：あけぼの組教室

指導者 藤 石 勝 巳

1. クラス名：みずほⅡ組（3年生）

男子 10名 女子 6名 計 16名 聖徳式（個人）平均 IQ 151.6

2. 授業設定の視点

一人ひとりの個性や興味・関心、能力に応じた英語学習

個々の子どもたちの能力も高く、授業でも大きな声で積極的に取り組んでいる。語学の学習においては特に、子どもが他の子どもから学ぶことの大切さを意識させていければと思っている。一人ひとりの個性に対応するため1クラスを半分に分け、2グループの少人数で指導している。

3. 授業のテーマ：“At the Zoo”（英語で動物を学ぶ）

4. テーマについて

聖徳学園では英語教育を3年生から行なっている。3年生では主に英語の音に慣れることを目標としている。そのため子どもたちの身近にある「教室にあるもの」、「動物」、「家の中にあるもの」、「町の中にあるもの」、「職業」、「乗り物」などの語彙を英語で紹介し、日本語にはない英語の音に慣れさせていく。また多くの英語の音を通して、体を動かしながら自然に英語のリズムやイントネーションが身につくようにしている。そして英語の文字の基本となるアルファベットの大文字、小文字を練習し、さらには文字と発音の関係を知る基礎となるフォニックスアルファベットを身につけることで、その後の英語の文字や文の読みに発展させていく。4年生では、3年生で身につけた基礎をもとにして、聞く英語から少しずつ自分について話す英語へと広げていく。「自分の年齢」、「住んでいる所」、「好きな食べ物、動物、スポーツ、色」、「何時に起きるか」、「どうやって学校に来るか」などの質問に答えられるように練習する。また文字についても少しずつ単語レベルの読みから文を読むレベルへと発展させていく。5年生になると、絵本やテーマに基づいた英語学習が中心となる。そして6年生ではさらにテーマを広げ、「水の循環」、「太陽系」、「世界遺産」など、英語を通して環境問題などにも目を向けさせたいと思っている。

今回扱うテーマは3年生で学習する「At the Zoo」である。

5. クラスの実態

3年生はこのクラスはこの4月から英語の学習が始まったばかりである。

1学期の前半は、簡単な英語の挨拶、名前の言い方、天気、曜日、日付、1から10までの数などを練習してきた。またたくさんのお歌を通して、リズムで英語が身につくようになってきた。

以前に英語に触れたことのある子どもも多いが、基本的に初めて英語を習うという子どもを対象のつもりで授業をしている。初めは英語だけの授業に緊張していた子どもたちも最近ではだいぶ慣

れ、一生懸命習った英語でコミュニケーションしようとする姿勢は微笑ましい。3年生の耳の良さを活かしながら、英語の基本的なリズムや発音を自然な形で身につけてほしいと思っている。

子どもたちも毎時間目を輝かせ、今日はどんな英語が学べるのか、どんなゲームができるのか楽しみにしている。元気の良い子どもたちが多く、大きな声で発音し、一生懸命取り組んでいる。ただその元気な取り組みを大切にしながらも、コミュニケーションで大切な「しっかり相手の話も聞く」ということにも留意しながら指導していきたい。

6. 目標

- ① 動物園にいる動物を中心に英語での名前や色や簡単な体の特徴を学ぶ。
- ② アルファベットの大きな文字を身につける
- ③ 様々なゲームや活動を通して、英語の楽しさを知る。

7. 本時の指導過程

ね ら い	学 習 活 動	指導の重点および留意点
あいさつ	<ol style="list-style-type: none"> 1 挨拶をする 2 天気、日付等を聞く 3 歌を歌う 	<ul style="list-style-type: none"> • 元気に大きな声で発音されているか
アルファベットの練習	<ol style="list-style-type: none"> 4 アルファベットの大きな文字を歌やゲームを通して練習する 	<ul style="list-style-type: none"> • 正確に発音できているか
動物の語いや特徴を学ぶ	<ol style="list-style-type: none"> 5 動物の名前や色、体の部位などを練習する 6 絵本やゲーム、活動を通じた活動をする 	<ul style="list-style-type: none"> • 声が出ているか • 友達の発言に耳を傾けているか
まとめ	<ol style="list-style-type: none"> 7 あいさつ 	

理科学習指導案

9 : 15 ~ 10 : 15 於 : 多目的情報室

指導者 三輪 広明

1. クラス名 : あさま組 (5年生)

男子 24名 女子 10名 計 34名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 176.1

2. 授業設定の視点 : 創造的知能を発揮して、毛細管現象の要因を探る学習指導

3. 授業の題目 : 毛細管現象

4. 題目について

毛細管現象とは、細い管をビーカーの水の中に入れると、ビーカーの水面よりも高いところまで水が入る現象である。日常生活の中でも様々な場面で目にする現象であり、子ども達にも身近な自然現象の一つであると思われる。これまで、単元の学習の中では特別取り上げることはなかった。今回、子ども達に実験方法を考えさせる活動の場として取り上げてみた。それは、そうすることによって、子ども達の意欲が喚起できると考えたからである。

これまで、子ども達が実験の方法を自ら考えることは様々な場面で行ってきた。たとえば、5年次の、植物の発芽の条件の実験、6年次では、混合物から純粋な食塩を取り出す実験などが挙げられる。これらの実験は、班ごとで実験方法を考えさせ行ってきた。いずれの場合も、子ども達の意欲は高くなり、時にはこちらの予想できなかった実験を試みることもあった。

本題目では、「毛細管現象」を題材とし、子ども達自身が実験方法を計画する授業を設定した。ここでは、液体がどこまで上に上がっていくのかと言う点の追究を通し、毛細管現象が顕著に表れるのはどのような時なのか、その要因となることを、予想し、その予想を検証する実験の計画を立て、実施するようにと考えた。要因として何が挙げられるのか考えていくことは、毛細管現象がどのようなことであるのか、と言う点を考えていく手掛かりとなると考えられる。温度であったり、液体の性質であったり、密度であったり、管の太さや素材であったりと、様々な要因が考えられる。これらのことを、知識として押さえたいわけではなく、探究していく活動そのものを学習の目標と定めた。この探究活動こそ創造的知能を活用するよい学習の場であると考えからである。

5. クラスの実態

5年生になり理科への関心や興味も個人差が少しずつ出てくると思われる。しかし、実験をするということとなると、広く、関心は高まっていく。自ら調べてみたいという意欲がとても高いものがあると感じられる。話し合いの中では、身近な体験から考え深めていこうとする人も多く、話し合いは、活発に進められている。素朴な疑問や、独自の視点から考えを述べることができるのも彼らの良い面と感じるところである。こうした点がいい形で授業の中で出てきている。

授業の中でのこうした発言を通し、問題解決のための糸口を様々な観点から考えだす面が彼らの特質であると感じる。

なお、本クラスの平均IQとFQは以下のとおりである。他の因子と比べ、集中思考力が高い点がクラスの特徴として表れている。本題材の学習で発揮されることが期待できる力と考えられる。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
176.1	188.0	165.3	175.0	176.9	184.8	167.5	184.2	167.2

6. 指導計画

- (1) 毛細管現象の要因となることを予想し、検証する実験の計画を立てる。……………1校時
- (2) 実験を行い、予想したことを検証する。……………2校時（本時1校時目）

7. 本時のねらい

各班で計画した実験を行い、毛細管現象の要因となることがどのようなことであるのか検証する。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
1. 課題の把握	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 課題1 毛細管現象で液体が高く昇っていくのはどのようなときか。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ○班ごとで立てた実験の計画を確認する。 ○班ごとで役割を決め実験を進める。 ○実験の結果から、毛細管現象を引き起こす要因であったのかどうか考える。 ○結果よりなぜそのような結果となったのか考察させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○要因として、管の太さや、液体の密度といったこと、また水温等子ども達の発想も大事にしながら予想を膨らませていく。 ○班の全員が実験に関わったか。 ○安全に心を配りながら実験を進めることができたか。 ○ガラス器具の破損への対応。 ○水面が何cm上昇したのか測定する等、定量的な実験となるよう留意させる。
2. 結果の発表	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 課題2 どのようなときに毛細管現象で液体が高く昇っていくのか。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ○液体が高く昇っていく要因をまとめ、またなぜそれが要因となるのかその意味を考えさせる。
3. 学習のまとめ		<ul style="list-style-type: none"> ○学習を通し、わかったこと、疑問に思ったことをまとめさせる。

歴史科学習指導案

9：15～10：15 於：ほくと組教室

指導者 和田 知之

1. クラス名：ほくと組（5年生）

男子24名 女子10名 計34名 聖徳式（個人）平均IQ 170.6

2. 授業設定の視点：松下村塾に人が集まる理由を、門下生の視点から探っていく。

3. 主 題：人物伝Ⅱ（吉田松陰）…松下村塾…

4. 主題について：

聖徳の歴史科のカリキュラムは4年生前半の『昔話』、4年生後半から5年生前半までの『人物伝』、5年生後半からの『通史』に分けることができる。『人物伝』の指導目標は「歴史上の人物の行動や業績から、その人物の考え方を学び、当時の社会・生き方について関心を深める。」である。今回扱う『吉田松陰』は4年生で行う他の人物伝『釈迦』、『聖徳太子』、『豊臣秀吉』、『徳川家康』に比べると地味であり、知名度も今ひとつである。しかし、子ども達は松陰の人物伝を少しずつ学習することで松陰の生き方に共感を持ち、松陰の魅力に惹かれていくのである。この人物伝では吉田松陰の一生をたどりながら、松陰の物の見方、考え方を知り、当時の社会情勢と松陰の行動との関係を考えさせたい。前時の授業ではグループごと興味のある門下生について調べ学習を行う。門下生の業績だけでなく、彼らの性格、松下村塾に来るようになったきっかけを調べ、それぞれの門下生になったつもりで『松陰先生への手紙』としてまとめさせたい。その手紙には松陰への感謝の気持ちや松下村塾への期待を書くこととする。グループごと作った手紙の内容を聞くことで、松下村塾が当時の人々を魅了し、倒幕や明治維新の立役者が数多く生まれた背景を探らせたい。

5. クラスの実態：

5年生の両クラスの歴史を担当しているが、両クラスに共通することが、全般的に歴史に興味を持っている児童が多いことである。大河ドラマの影響等もあるが、4年生で行った人物伝により、児童の好奇心が刺激されたことや歴史的なイメージ付けができてきたことが挙げられるだろう。歴史の授業では市販のノートを使わず、聖徳の歴史科で独自に開発したノートを使用している。教員が黒板で説明したことだけを書くのではなく、教員の説明や友達の発言なども、自分の興味に応じて記入をしている。実際に子ども達のノートを見てみると、歴史上の人物や自分の考えたキャラクターをノートに登場させ、その人が授業のポイントを語るといったまとめ方をしていたり、その内容に合った場面絵を使っているなど、多くの人が工夫をしている。今回の授業ではグループごと作った門下生の立場に立った『松陰先生への手紙』を発表させる。ノートで見られるような一人ひとりの興味、関心の特性や工夫を取り入れたものになると期待している。

6. 目標：

吉田松陰の行動や業績を学びながら、松陰の考え方や物の見方を探らせる。

7. 指導計画：13時間扱い

- | | |
|------------------|--------------------------|
| 1. 少年時代……………2時間 | 6. 密航……………1時間 |
| 2. 御前講義……………1時間 | 7. 野山獄……………1時間 |
| 3. 遊学……………1時間 | 8. 松下村塾……………3時間（本時は3時間目） |
| 4. 脱藩……………1時間 | 9. 安政の大獄……………1時間 |
| 5. ペリー来航……………2時間 | |

8. 本時のねらい

松下村塾において、松陰が門下生に対して何をどのように伝え、どのような人物が育ったかを知る。

9. 本時の授業展開

ねらい	学習活動	指導の重点および留意点
1. 前時の確認	1. 松下村塾の基本的な内容に関して思い出す。	1. 前時までの既習事項を思い出させ、さらに本時の導入とする。
2. 門下生の行動、業績を理解する。	2. 前時に作成した門下生からの『松陰先生への手紙』を発表する。	2. ・当時の門下生の立場で書かれているか確認する。 ・手紙の中に「松下村塾でどんなことを学びたいか」を盛り込ませるようにする。
3. 松下村塾で行われた授業がどのようなものだったかを理解する。	3. 門下生達の学ぶ意欲に対して松陰はどのような授業を行ったか考える。	3. 教員が説明するというよりは、子ども達から自然に導き出されるようにする。
4. 松下村塾に人が集まる理由を理解する	4. 松下村塾が当時の人々を魅了し、倒幕や明治維新の立役者が数多く生まれた背景を探らせる。	4. 内容の理解度を評価する。次回の目当てにする。
5. まとめ	5. 本時の内容についての感想を述べる。	

理科学習指導案

9:15～10:15 於:理科実験室

指導者 米 持 勇

1. クラス名:あけぼの組 (6年生)

男子16名 女子12名 計28名 聖徳式(個人)平均IQ 172.1

2. 授業設定の視点:科学実験を通して創造的知能の開発を目指した学習指導

3. 主 題:燃焼前後での物質変化～植物体と金属の燃焼について～

4. 主題について

本校理科の教育課程では、2～3年生において「創意性・拡散思考・評価力」を主として知能開発し、4～6年生においては獲得した知能を活用させて総合的に考える力を養い、理科的な考え方の能力を育成するようにしている。特に6年生では、「関連付け」「視点の転換」「一般化」という思考から問題を解決させる場面を多く設定することを心がけている。これまで理科の学習として、2年生で「身のまわりの空気存在について」、3年生で「空気であらうで空気が押し縮められる性質」、4年生で「空気の重さについて」、「三態変化」について、空気や気体に関することを系統的に学習してきた。「6年生として本単元では、空気中の代表的な気体として酸素、二酸化炭素の発生方法とその性質について学習する。性質については主に助燃性の有無、水溶性、気体の重さについて扱った。ほとんどの児童は、植物体である木や紙、ろうそくなどが燃焼すると、二酸化炭素を発生することや、空気中の酸素が不足すると火が消えることは日常生活の経験からも良く知っている。本時ではその発展としての扱いで、植物体ではない金属で「鉄」を燃焼した時にどのようなかを考える。鉄が燃えるというのは考えにくいところであるが、スチールウールのように細い線状になったのであれば、燃えやすくなるということを確認する。燃焼とは酸化反応の一種であり、酸化反応とは「物質が酸素と化合する化学変化」である。特に「物質が熱や光をともなって、激しく酸素と化合する化学変化」を「燃焼」と定義している。また木や紙などの植物体は燃焼して炭や灰になることを知っていれば、燃焼後、軽くなると予想する児童が多いと思うが、どうしてそうなるのか、もともとの物質の重さはどこにいつてしまうのかを科学的に考えさせたい。同様に金属の鉄の場合も重さが増える理由についても、実験観察を通しての発見、または化学反応として捉え分子の観点から考えていけるように指導していきたい。

5. クラスの実態

毎回の授業からは、理科の実験を楽しみにしている児童が多く、クラス全体的に学習熱心な姿勢が伺える。6年生では「てこ、輪軸、電磁石」といった物理系の学習になるが、男女偏ることなく積極的な挙手、発言が見られている。学習内容については、事前に知識として習得している児童が見られるが、実際に見たり、触ったり等の実験で確かめる経験は少なく、結果につながる過程、原

因、考察についての考えとなると、まだ表面的な理解であることが少なくない。授業では、実際に実験で確かめる事とともに、各自が持っている知識をもとに、なぜそうなるのかという理由、実験を通しての予想、結果、考察の部分を考えていくことを大切にしている。

なお、本クラスのIQおよびFQ（知能因子指数）の平均は以下のとおりである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
172.1	182.0	165.0	168.8	175.0	176.4	163.6	178.6	166.8

6. 指導計画「単元：酸素と二酸化炭素（9時間扱い）」

- (1) 空気の成分について……………1時間
- (2) 二酸化炭素の発生法とその性質調べ……………2時間
- (3) 酸素の発生法とその性質調べ……………2時間
- (4) 水素の発生法とその性質調べ……………2時間
- (5) 物が燃えるための条件を考える……………1時間
- (6) 植物体と金属の燃焼について……………1時間（本時）

7. 本時のねらい

- 植物体（綿）の燃焼と、金属（鉄）を燃焼したときの現象を観察して違いを発見し、その理由を考察する。
- 反応前後の重さの変化について考察し、燃焼についての理解を深める。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
1. 周囲の予想と自分のものとは照らし合わせて考える。	① 植物体の「わた（脱脂綿）」を燃焼して燃焼後の物質の様子、重さの変化を考察する。	<ul style="list-style-type: none"> • 炎の様子、燃焼前後の重さの変化、煙の有無について予想させ、着目させる。 • 特に脱脂綿の燃焼には火災や火傷に十分に注意させる。
2. 燃焼中の様子、前後の変化を確かめ、観察・発見をする。	② 金属の「鉄（スチールウール）」を燃焼して燃焼後の物質の様子、重さの変化を考察する。	<ul style="list-style-type: none"> • 特に燃焼前後の重さの変化について考察させる。 • 酸素との結びつきという点に迫るようにする。
3. 実験の結果から考察して、燃焼について理解を深める。	③ 植物体と金属の燃焼の様子の相違点について考察する。	

歴史科学習指導案

9：15～10：15 於：はくたか組教室

指導者 内藤 茂

1. クラス名：はくたか組（6年生）

男子 19名 女子 11名 計 30名 聖徳式（個人）平均 IQ 170.8

2. 授業設定の視点

「出島から吸収したもの」「日本独自の発想とは？」を比較し、創造的思考力を刺激する

3. 主 題：日本通史（江戸時代・文化史）『鎖国の中の小さな窓』

4. 主題について

○教材について

6年生は、5泊6日の九州・山口（萩）への修学旅行を終えたばかりだ。

最初の目的地・長崎では、原爆資料館を見学したり被爆者の方からお話をうかがうといった平和学習を中心に、出島資料館や唐人町といった様々な歴史学習がなされた。これら学習の本筋とは別に、子ども達が楽しみにしていたのはカステラや長崎ちゃんぽんなどのお土産のショッピングだった。

しかし考えてみると、長崎の代表的な土産といえば江戸時代の鎖国政策・出島の存在と表裏の関係にあるとって過言ではない。一般的に、江戸時代の学習で扱う『鎖国』では、「日本独自の文化が発達した」反面、「産業・科学の面で取り残された」と評価され、中には「島国根性ができた」という文言まで見られる。

果たして出島という「鎖国の中の小さな窓」を通して伝えられたものは、時計やガラス細工といった「ものめずらしい」嗜好品ばかりだったのだろうか？現代の私たちの生活に大きく影響したり、逆にヨーロッパや中国に影響を与えるような文化の発信はなかったのか？中国より伝わった磁器製作技術を柿右衛門が独自にアレンジし、ヨーロッパや中国の陶芸に影響を与えたように、鎖国だからこそ熟成したハイブリッドな発想が、明治維新後、近代化の中で形になっていったという考え方もできるのではないか。

自分たちの生活につながる創造性、現代でも評価できる独創性。こういったものを事実に基づいて発見することで、歴史の見方が養われるのではないかと思う。今回の授業では、杉田玄白（解体新書）、関孝和（和算）、三井高利（越後屋）の3人をピックアップして考えさせることにした。

この3人の業績は導入で扱う平賀源内と同じく、その独創性を高く評価されながらも、内容よりも超人的な努力や天才的なひらめき、といった点の印象が強い。その業績に至る発想や過程、そして現在とのつながりを見ることによって、「創造性とは？」という課題が子ども達の思考のきっかけになると考えている。

オランダ語を一から学び、日本語として全く新しい医学用語をつくっていった解体新書。

中国算学からの刺激を受け、独自の算学を築いていった関孝和。そして、まるで数百年を予見したかのような三井高利の新しい商法。それぞれが何をヒントにどう発展させたのかを子ども達に追及させたいとねらっている。

○発表力の育成

本校では4年生、5年生で人物伝学習に取り組むことから、それぞれ生い立ちから「人物の業績」をグループで調べさせる。しかし、単に調べたことをまとめて発表するのではなく、「どのように発表すれば理解を得られるか」という点にポイントを置きたい。つまり、教材内容とは別に「発表力の育成」を授業のテーマとして考えている。

05年度（第37回）英才教育公開研究発表会では、明治維新『文明開化』を題材に、グループごとにクイズを作ってみたり、コントをやってみたりといった発表に取り組んだことがある。また、09年度（第41回）においても実践した。そういった活動に対して、子ども達は勿論意欲的に取り組むのだが、各グループ、徹底的に調べないと形にならないため予想以上の成果を得ることがわかってきている。

今回、このときのように凝ったものになるかどうかは別に、「選ばれる」ということはプレゼンテーションのモチベーションにつながるものと考えている。

5. クラスの実態

本校の歴史カリキュラムは「昔話」→「人物伝」→「日本通史」と段階的に組まれているが、6年生での学習は週45分×2と時間的に限られている。そのために、「日本通史」が始まるのを5年2学期からと前倒しする必要があった。

本クラスは、人物伝学習までたいへんよい反応を示している。

教師の話聞くこと、板書取ることも大切なのだが、自分なりの「気づき」を自分なりに工夫して発表できることが重要と考える。本クラスの最近の傾向として発表者（教員も含む）と聞き手の片側方向での発表活動しか成立せず、もう少し、双方向での元気な学習ができないかと思案中である。やたらに詳しい知識を持つ者、発表を工夫して学習を盛り上げる者、それぞれが刺激し合っ

て学習を深めていくことを理想としている。

6年生としての時間的、気持ちの余裕の点で制限があるものの、子ども達が「おもしろい」と思ったときどのようなパフォーマンスを発揮するか、また、どんな歴史博士が誕生するか注目したい。

また、本校の歴史教育で重視しているノート活用、ノート指導においても、少しずつ個性が表れるようになってきており、その点も注目していただきたい。

6. 目 標：国のおこりから現代までを人物の働きを中心に学び、時代イメージをつくる

7. 指導計画：

1. 江戸幕府の成立（幕藩体制）…… 45分×4
2. 鎖国下の創造性（平賀源内）…… 45分×1
3. 出島文化の吸収と発展…… 45分×1、60分×1 [本時の学習]

- 4. 三大改革
- 5. ペリー来航

8. 本時のねらい

歴史上 (江戸時代) の人物の業績を創造性の観点から評価する

9. 本時の指導展開

ねらい	学習過程	指導の重点および留意点
<p>1. 大賞選出の観点を確認する</p> <p>2. グループ発表による発表 (30/60分)</p> <p>投票および結果発表</p> <p>4. 「独創性」はどこから生まれてきたのか?</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第一印象で選んだ独創大賞の投票結果を示し、選んだ理由を発表する。 ○ それぞれの人物の業績について、グループごとに発表する。 ① 杉田玄白の業績 ② 関 孝和の業績 ③ 三井高利の業績 ○ 「どの部分が鎖国文化の影響か？」 「どこを独創的と捉え評価するか」 ※ それぞれのアピールポイントを短く発表者が訴え、それをもとに意見を発表する。 ○ 再度、投票を行う ○ 第一印象の結果と比較して、授業のまとめを行う 	<p>観点を、「努力」「苦労」といった点から、「創造性」へ変換させる。</p> <p>→ オランダ語の翻訳というが、対応する日本語はあったのか</p> <p>→ どの程度の数学レベルか？</p> <p>算額からの実際の出題</p> <p>→ 現代でも通用する「もてなし商法」、薄利多売</p> <p>ランク付けが目的ではなく、「選ぶ」という行為には「観点」と「根拠」が必要。</p> <p>一方でプレゼンテーションの仕方でも結果が変わってくることに留意する。</p>

10. 評価

審査の結果と評価の観点から、「創造性」について自分の言葉で具体的に説明できる。

全 体 会

10：30～12：00 於：講 堂

1. 講 演 聖徳学園小学校・幼稚園の教育 校長・園長 加賀 光悦

2. 園児・児童発表 年長児 歌 唱
4年生 合 唱

3. 研 究 発 表 「未来をひらく戦士を育てるために
～一年生の学級経営を中心に～」
低学年主任 由里 敏夫

平成25年度の研究活動計画

研究部の活動計画

研究テーマ「英才児の創造的知能の開発と育成」

恩田彰先生は創造性を「新しい価値あるもの、またはアイデアを作り出す能力すなわち創造力、およびそれを基礎付ける人格特性すなわち創造的人格」と定義している。つまり、創造性は創造力と創造的人格の総合概念であるということになる。

創造過程という観点から見た場合、この新しさとは、社会的価値基準に照らしたものではなく、個人にとって価値ある新しさという基準が立てられるというのである。これを、自己実現の創造性と言い換えることもできるわけで、学校教育では特に重視されることになる。即ち、創造活動では独創性が尊重されるから、個性の開発と育成が基本となってくる。これは私たちにとって、創造性を考える際のもっとも基本的視座になるものと思う。

また創造性は、創造的思考、創造的技能および創造的態度の三つの側面からとらえることができるという。この面から見た時に私たちには多くの蓄積があるわけであり、特に知能教育が積み上げてきた成果は言うまでもないことである。

私たちはこれまで、次のような研究課題を挙げて取り組んできている。

- (1) 各教科における創造性教育の実践例の整理 — その因子と方法（技能）—
- (2) 各教科における創造性教育の可能性を探ることと、因子の特定
- (3) 子ども達の成長と、創造性の相互関連を明らかにすること
- (4) 英才児の創造的思考の実態の抽出
- (5) 子どもの、イメージーションの問題として捉える方法

これらについては、平成9年度夏期研修合宿の場で、園田元校長より「創造的知能をどのような内容と方法で開発育成するか」の研究の指針として、以下①～④の提案があり、各場面で、実践・研究を繰り返している。

- ① 知能訓練（知能あそび）による創造的知能の育成と開発
- ② 教科の指導による創造的知能の育成と開発
- ③ 学級活動・委員会・クラブ・自由研究・学校（園）行事等の特別活動による創造的知能の育成と開発
- ④ 個性・創造性を認める環境作り

— お互いを認め合う雰囲気・横並びや同質思考に捉われない価値観等 —

(4)の具体的取り組みについては、10年以上前までに遡って、過去の実践研究・授業研究・公開研究発表会・自由研究・特別研究などの中から、英才児の創造性に関わる研究の洗い出しをする。また、定期テストの成績検討会議に全教員が、特色ある児童の実態を報告する資料『英才児を探るⅡ』も、これまでに形態を変えながら積み重ねてきている。今年度、新たに「英才児を探る」委員会が新設されたことにより、『聖徳学園における“英才児像”』を集約する体制が整ったので、より内容を明確にしてまとめていきたい。

(5)の具体的取り組みについては、次のa.～d.がある。

- a. 各教科の年間指導計画の中に創造性との関わりを捜していく。
- b. 教科毎に研究テーマを設定し、教科の責任において研究を推進する。
- c. 英才教育の指針を定める基盤を作りつつ進むために、各個人がテーマを決め実践する。
- d. 本校ならではの、教材・授業展開・2人指導制などに重点を置いた授業研究。

知能教育研究部の活動計画

本校では昭和44年から小学校における知能教育の実践研究に取り組んでいる。「知能教育」というのは、文部科学省の学習指導要領の内容にもなく、むしろ教科書もない。従って、教育内容（カリキュラム）から教材・教具まで全て独自に作り上げていかなければならない。

そこで、我が国の知能教育の先覚者伏見猛弥先生の指導を仰ぎ、アメリカのギルフォード教授の知能構造理論に基づき、実践を重ね、知能教育の基礎を築き上げてきた。現在は、2歳児から小学4年生までを対象にして、一貫した教育内容と方法で、「幅の広い思考力の育成」と「創造性豊かな人間性の育成」をめざした研究活動に取り組んでいる。

1. 目標及び活動内容

(1) 知能因子の分析と教材開発

知能教育の教材・教具は全て手作りのため、週一回の定例の研究会では日々新たな教材開発を中心に行っている。教材作成においては、次の点に留意して研究を深めている。

- ① 授業のねらい（知能因子）を十分に押さえる。
- ② 子どもの発達段階（興味・知識・思考）を考慮する。
- ③ 単なる子どもの興味だけに流されなくて、教育的価値を十分に考慮する。
- ④ 一人ひとりの子どもの能力に十分対応できるように（能力の限界への挑戦）、内容に幅をもたせ、発展性のあるものにする。
- ⑤ 学習の流れに変化をもたせるようにする。
- ⑥ 個別指導について十分に配慮する。

(2) 指導技術の向上

知能教育というのは、知識を教えるのではなく考える力を育てるわけであり、必然的に教科の学習指導法とは異なる点が多くなる。そこで毎時間の実践記録を基に、次の点をポイントにして授業研究を深め、指導技術の向上を図っている。

- ① 一人ひとりの子どもの能力と個性に応じた指導を行う。
- ② 意欲・集中力を育てる。
- ③ 教えるのではなく、考えさせることに重点を置く。
- ④ 思考過程を大切にす。〔「できた・できない」の結果だけにこだわらない。〕

(3) 実践結果の分析と資料作り

2. 今年度の活動の重点

- (1) 二人指導などの聖徳の特色を活かした指導方法の研究を深め、指導技術の充実を図る。
- (2) 『聖徳式知能検査法』の実施結果を分析し、充実を図る。
- (3) 個性と能力に応じた指導の充実。
- (4) 授業での実践を通しての研究を継続的にまとめ、次の教材開発や授業に活かす。

国語科研究部の活動計画

1. 目標

- (1) 言葉に先行する精神発達の最前線における児童の成長の課題と児童を接触させることにより、その精神発達を促そうというのが私たちの基本的考え方である。
- (2) そのためには、英才児に特有の思考・感情および意識の発達の実態を捉え、その基礎資料に基づいた教材の開発、授業方法の研究がなくてはならない。

2. 研究課題

成長の課題を授業として取り上げるためにはこれに適した素材がなくてはならない。したがって、検定教科書をそのまま使用せず、幅広くさまざまな文章を集め教材としている。私たちには成長課題の特定と教材の選定が何よりも重要なことである。

そこで、人間の意識活動を大きく、感情・思考・構えの三つに分け、これに用具言語を加えた四本の柱によって私たちの国語の学習領域は構成されている。用具言語は言語作業的な領域を含み、主に練習によって習得するものである。言語作法・文法事項・漢字を含む語彙などである。

感情の領域は、感情であるから喜怒哀楽をということだけでなく、子ども達の感情発達の階梯を見届ける姿勢をとっている。例えば、「ごんぎつね」はひとりぼっちを、「しろいぼうし」は現実・非現実を考えるための材料となる。この場合授業はひとりぼっちをめぐるの、子ども達一人ひとりの課題・問題点を整理する場となる。

思考は感情とともに人間の精神活動の重要な一部である。人間の思考路線を、児童の中に追究する姿勢をとり、一人ひとりの思考の内容・方法・段階に接近している。

構えとは、身構え・気構え・心構えなどという感覚構造を示す言葉で、母国語の習得を考えるとき、なくてはならない視点であると考えている。われわれは、生まれたときから、人間らしい対象の定め方を習得し、その対象と人間の交わりにおける人間限定のあり方を構えと呼んでいる。

3. 今年度の重点目標

① 児童の成長の実態と教材の系統性の追究

イマジネーションがもたらす創造性開発と育成、3～4年生の成長の節目に対応した教材の開発、高学年における思考教材の開発などの課題について研究を進めている。

② 卒業論文指導の充実

「私と言葉」これが論文のテーマであるが、子ども達一人ひとりが自分の課題として取り組める題材の開発発見が課題である。書きながら考える、書くことによって考える、そうすることによってまだ明確にしていなかった問題点をつかんでいく、このような姿勢を子ども達が獲得していくためにも、そこに至るための学習の充実を更に促していく必要がある。

③ 英才児の特徴を考えるための資料の収集

教材構造が子ども達の成長・発達に接触しているか検証するためにも、われわれの特色ある教育を推進するためにも必要な基礎資料である。

④ 素読

輪講の実践からその可能性を追究する。

数学科研究部の活動計画

事象を数理的にとらえ、論理的に考え、統合的、発展的に考察し処理する能力と態度を育成することを目標としている。具体的な学習活動については、以下の通り。

- ：数量・図形などに関する基礎的な知識の習得や基礎的な概念・原理・技能の理解・習熟を図り、的確に活用して数学的な処理・考えを生み出す能力を養う。
- ：数学的な用語や記号を用いることの意義について理解を深め、数量・図形の性質や関係を簡潔・明確に表現し、思考をする能力と態度を養う。
- ：事象の考察に際して適切な見通しを持ち、論理的に思考する能力を伸ばすと共に、目的に応じて結果を検証し処理する態度を養う。
- ：体系的に組み立てていく数学の考えを理解させ、その意義と方法を気付かせる。

1. 今年度活動のねらい

- (1) 児童が挑戦するなかで、能力を高められる授業及び教材の研究と充実。
- (2) 学年（クラス）間の相互連絡を密にして、系統的な学習指導の徹底を図る。
- (3) 各単元と知能因子の関係について探り、個々の創造性を生かした授業形態を追究する。

2. 今年度の活動の重点

- (1) 基礎学力の充実及び能力の限界に挑戦させるべく、個々の児童に応じた指導と教材研究を行う。
- (2) 一人ひとりの子どもの個性と能力差に応じたきめ細かい指導を行うため、二人指導制を更に充実させていく。
- (3) 毎月1回実践報告会を開き、各学年及びクラスごとの指導状況・反応・反省を出し合い、本校の数学教育の特徴をより明確に実践していくためのカリキュラム・テキスト教材・指導方法の再検討と熟成を図っていく。更に、プリント・ゲーム類もそれぞれのクラスの実態に応じて工夫し利用していく。
- (4) 授業研究の充実を図るために、校内授業研究や教科内での授業研究を行っていく。
- (5) 個性を伸ばすという本校の教育目標、また数学への興味付けという観点から、「算数オリンピック大会」など外部の催しにも積極的に参加する。
- (6) 各指導者が数学の指導に関する自主研究テーマを設定し、年間を通じてその研究に取り組む。また、その成果を互いに発表し検討を行うことにより、力量を高め合う。
- (7) 聖徳の特色ある数学教育を推進していく。

英語科研究部の活動計画

1. 活動のねらい

- (1) 前年度を振り返り、カリキュラムの精選・吟味を行う。
- (2) 子どもの活動を中心とした授業、教材に留意する。
- (3) 少人数での授業形態を活かし、一人ひとりの個性に合わせた指導に努める。
- (4) 授業形態にあわせた「評価方法」に留意する。
- (5) 異文化に触れる機会、教材の設定に留意する。
- (6) コミュニケーション能力育成のため、スピーチ活動に重点を置く。
- (7) インターネット等を使った国際交流を実践する。
- (8) 外国人教員とともに指導内容・方法・評価について研究する。

2. 方法

毎週行われている教科会の中で検討していく。

各教員がお互いの授業を研究し、英語科での共通の課題を見つけ取り組んでいく。

また、外部の様々な研修会等に参加し研鑽を積む。

3. 今年度の活動の重点

- (1) 子ども達の興味関心や発達段階に応じたカリキュラムになるよう、今まで実践してきたテーマや指導内容についてもう一度検討、吟味していく。
- (2) 絵本を中心に、話の内容を楽しみながら、英語の単語や表現をできるだけ自然な形で身につけられるように指導していく。そのための絵本や教材の研究に力を入れていく。
- (3) 教員から一方的な知識を与える講義式の授業に陥らないように、ゲームやその他様々な活動を通して子ども主体の授業になるよう心がける。
また、小学生は音声面で優れているので、歌やナーサリーライム・ジャズチャンツなどを通して、この時期にしか身につけられない英語の音に慣れさせる。
- (4) 指導内容の検討だけでなく、その内容をどう教えていくかという指導方法について、教科内でお互いに提案し実践する。
- (5) 小学校での英語教育の評価方法を考えるとき、ペーパーテストだけでは測れないものが多い。面接試験を行うことで、子どものスピーキングやリスニングの力を知ることができる。その面接試験のあり方についてさらに研究、工夫する。また英語学習の集大成としてスピーチに取り組ませる。
- (6) 本校での英語教育が現在中学校で行われている英語教育の先取り教育にならないように、小学校での英語教育の目標を再検討する。子ども達が国際的視野を持った大人になるためには、どのような学習が必要なのか（特に小学校段階においては）を検討する。
- (7) 現在のカリキュラムに基づいた授業だけでなく、定期的に世界のいろいろな国の人たちと接する機会を持てるような企画を立てる。また、希望者には児童英検などにチャレンジさせ、児童の英語学習の励みとなるようにする。

理科学研究部の活動計画

1. 目 標

- (1) 各クラスに応じた授業を工夫し、児童の能力の限界に挑戦させ、学力を保障する学習指導の推進を行う。
- (2) 各学年の発達段階に応じた授業を工夫し2年生から6年生までの系統的な学習指導を目指す。
- (3) 飼育活動や観察会・見学会などの企画を通して、児童の科学や自然に対する興味・関心の向上をはかる。

2. 今年度の重点項目

- (1) 英才児の知能を活かした授業の実践
英才児の創造的思考を引き出すための各学年の指導方法・内容を開発し、その実践を積み重ねていく。
- (2) 日常生活に密着した理科の指導
身近な生活の中の疑問や自然と触れ合う実体験を大切にした指導の具体化をさらに進め、実践の中からよりよいものを目指していく。
- (3) 自然観察会の充実
〈位置付け〉 ①自然と直接触れる場 ②授業への興味付けの場 ③授業の発展の場
今年度の主な活動内容（予定）は、以下の通り。
 - a. 植物の観察（3年生対象） ◇川原の草花の観察・スケッチ …… 10月19日（2学期）
 - b. 動物の観察（5・6年生対象）◇野鳥の生態の観察 …… 2月予定（3学期）
 - c. 星の観望会（5・6年生対象）◇月・惑星の観望 …… 1月16日（3学期）
 - d. 石の仲間集め（aと同時に開催）◇石の色・粒子などの違い …… 10月19日（2学期）
 - e. 上流域の観察（4年生対象） …… 5月18日（1学期）
- (4) 特別授業の企画・実施
○ SSISS（Scientists Supporting Innovation of School Science）NPO法人科学技術振興のための教育改革支援計画の特別授業を実施……特別研究理科対象
- (5) 気象観測活動の充実・地震に関する掲示の充実
東日本大震災をきっかけに、気象観測委員会の活動の一環として、日常的な地震の観測活動に取り組んでいる。

3. 継続的に取り組んでいる項目

- (1) 実験技能の向上と安全確保を目指した指導方法の開発。
- (2) 視聴覚教材の充実。
- (3) 施設を利用した校外授業の充実。
2年生『恐竜』 ◇国立科学博物館の見学 …… 9月（2学期）
5年生『星』 ◇プラネタリウムの見学 …… 12月（2学期）
- (4) 飼育活動（水槽・温室）栽培活動（花壇等）に関する研究。
- (5) 自然のたより 2年生を対象に、身近な自然の観察記録をとり、週に一度、冊子にして配布。

地理科研究部の活動計画

1. 目標

- ① 「空間的な広がり」をつかませるために、さまざまな角度から地理的事象を眺め、思考させる。(2～4年)
- ② 人間関係を理解する上において、自然環境を広い視野からとらえ、人間生活との関係、地域相互の関係を考察し、処理する能力と態度を育成する。(4～5年)

2. 指導方針

- ① 鳥瞰図的視点を獲得し、空間の連続性を意識しながら、地図を豊かなイメージでとらえていく能力を養う。
- ② 地図・統計の取扱いについての知識・技能を獲得し、それらを使いこなせる能力と態度を養う。
- ③ 地図・統計の中から、目的に応じて適切な資料を選択し、信頼性・妥当性を検証した上で、判断の基準の中に組み入れていく能力と態度を養う。
- ④ 諸外国の文化に対する理解を深め、国際社会における日本の役割を考え、国家および世界の一員としての自覚を深める態度を養う。
- ⑤ 日本の国土の保全及び地球規模での環境問題について考える態度を養う。

3. 今年度の研究課題と教育活動

① 指導内容と教材の精選化

英才児の地図学習のあり方について、研究を深めていく。

5年生の産業の学習において、4年生までの学習をより有効に活用するための教材・授業形態を工夫していく。その際、日本と世界のつながりという点も重点の一つとしていく。

特別研究に関して、特に3学期の世界的な視野での問題解決のためのアプローチについて、さらに充実させていく。

② 学校行事と結びつけた効果的な学習の内容と方法の研究

林間学校・修学旅行などと、地図学習・自然地理・地誌学習との効果的な融合のさせ方について検討していく。また秋の校外授業については、5年生の工場見学などを計画する。

③ 巡検（対象：5年生以上の希望者）の充実

身近な地域での地図の読図など、子ども達の主体的な取り組みを中心にして、毎年行っている。今年度は11月1日を予定している。

④ 作品および教材掲示の充実

スペースを最大限活用しながら、児童の作品や立体地図模型と説明文などを中心に、掲示が学習の意欲付けとなるよう心がける。

歴史科研究部の活動計画

歴史科では、4年生から3年間を通じて、歴史認識に必要なさまざまな思考力を育成することを目標としています。ただ単に知識を蓄積していくのではなく、頭の中に思い浮かべるイメージを大切に、そこから展開される歴史叙述をもっとも重視します。

歴史学習の第1段階は、「想像力の育成」です。過去の出来事という追体験のできないことを、子ども達が思考や体験の中に持っているものの中から、イメージとして再構築することに授業の重点を置いています。具体的には、歴史学習の導入期として物語を通して楽しく達成できるように工夫しています（昔話・人物伝学習）。

次の段階として、「立場や視点を転換してとらえる思考の育成」に重点が置かれます。その時代の人間になったつもりでものを考え、歴史事象を異なった視点から対比する思考の働きです。

こういった指導は、現代的な発想や一面的な思いこみに偏らない柔軟な思考を可能にさせます。5年生での人物伝学習で、吉田松陰と井伊直弼といった対極的な立場にある人物を扱うのは、このような理由からです。

そして最終段階として、「自分なりの課題を見つけ、資料に基づいた論理的な思考」ができるようにめざしています。ここで言う「論理的思考」とは、物事の原因・結果・影響が相互に関連しながら流れていくことを認識させることです。

こういった思考を学習の中で表現するとき、概念があいまいなままに知識を並べていくのではなく、人間が主人公となって自分なりの仮説や歴史叙述ができるように、一人ひとりの特性にあった働きかけを大切に考えています。

[今年度の重点課題]

1. 「学園のあゆみ」における授業深化をめざす

「建学の精神」を子ども達に伝える…… 私学においては大変重要な課題です。歴史の授業では、卒業を前に人物伝として「学園のあゆみ」を取り上げてきましたが、さらなる教材研究によって、各学年の段階を追った学習をめざしています。

2. フィールド学習の充実

昨年度は奈良時代・武蔵国分寺跡を歩き、1000年以上前の「天平の甕」（国分寺瓦）拾いに、子ども達は夢中になりました。今年度も戦国の山城・八王子城跡を計画し、土曜休みを利用したフィールドワークの特別授業を実施します。

3. 発表力の育成

グループで調べ学習を行い発表する、という旧来のものから一歩進めて、子どもなりに発表方法を工夫させ、歴史的な出来事を寸劇やコントで発表したり、テーマクイズにしたりという指導にも力を入れています。

4. 東日本大震災を子ども達にどう伝えるか

未曾有の被害をもたらした東日本大震災を、歴史的な災害というだけではなく、復興に向けての国民の動きも含め現在進行形の歴史としてとらえさせたいと思います。

体育科研究部の活動計画

聖徳学園では、児童の発達に応じた指導を行い、子ども達一人ひとりの能力を最大限に発揮できるようにしています。そこで、体育科では、次のことについて指導の重点を置いています。

1・2年生については「遊び」を中心として、子ども達が体育に対して興味を示し、楽しく学習出きるような教材づくりに重点を置いて指導しています。また、3・4年生では「ゲーム」を中心としてルールを守りながら、集団スポーツの楽しさを教えていきます。5・6年生になると今まで学習してきた内容に更に技術的な内容を加えて、基礎を中心に指導しています。

この時期に技術的な内容を学習することで、高学年での発展へと結びつけていきます。特に高学年になると授業での工夫が必要になり、『できるようになるためには』どうすればよいのか？など子ども達が考えられるようにさせることが大切です。

○ 聖徳学園として独自性を出した体育科としてのカリキュラムづくり

子ども達の発達段階を十分把握して、教材の工夫などを中心に、子ども達の意欲づけになるような授業方法を目指しています。子どもにとって、わかりやすく、身につけやすい内容にしていきたいと思えます。

体育科行事計画

聖徳の体育行事は以下の3つを行っています。

〈運動会〉 10月上旬

毎年、幼稚園と小学校と合同で運動会を行っています。内容については、体育科で検討し、できるだけ新鮮な内容を目指しています。特に児童一人ひとりが活躍できるように取り組みや役割を工夫して場を多く持たせています。

〈マラソン大会〉 11月上旬

マラソン大会に向けて、体育科では練習計画を設定し、実施しています。特に安全面に重点を置き、子ども達が粘り強く能力を発揮できることを心がけています。距離については、次の通りです。

距離：1～3年＝2km、4～6年＝4km

〈スキー学校〉 2月中旬

3～5年を対象にして、毎年、3泊4日間のスキー学校を開校しています。場所は長野県北志賀高原にある竜王スキー場で実施しています。自然の冬の厳しさや楽しさを感じながら、高学年は技術の向上、低学年は楽しさを学びながら、スキーに慣れさせていきます。子ども達の様子を見てみると、小学校時代に3回は行けることになり、かなり滑れるようになります。

〈その他〉

この他には、11月23日(祝)に東初協の私立小学校との交流として行われる体育発表会にも積極的に参加しています。

音楽科研究部の活動計画

子どもの生理的発達段階〈聴感覚、指先の働き、声帯など〉は、幼児期から児童期にかけて急激なものがあり、またその発達時期、速度には個人差もあります。この時期に、子どもがどう音楽と関わっていくかは、その後の音楽活動、音楽生活をより豊かにしていく力を自ら育む上で大変大切です。豊かな自己表現力のひとつとしての音楽は、やがて自己実現力ともなり、また人間社会における情操を高めるひとつの大切な要素となっていくと考えられます。

本校では、児童の発達段階を踏まえ、一人ひとりの実態や特質に留意しながら、様々な授業、音楽活動に取り組んでいます。中でも特に、豊かな音楽体験、音楽の持つ芸術的特性である美的感動体験の分かち合いを何より大切にしています。その体験の分かち合いから生まれる心の解放感、協調性、社会性、創造性、探究心などを生かし、無理なく目標に向かわせることが出来るように研究活動に取り組んでいます。

1. 目標、及び活動内容

- ① 様々な音楽活動を通して刺激を与え、感性を育て、バランスよく基礎的な能力が身に着くよう工夫する。
- ② 見る・聴くことからイメージする〈鑑賞、読譜〉⇔表現する〈歌唱、器楽、リズム創作〉⇔聴き取る〈範唱、範奏、記譜、鑑賞〉など音楽の持つ多面性を、限られた授業時数の中で教材に生かすよう、そしてそれらが有機的に作用するよう考慮し研究する。
- ③ 低学年においては、特に聴力を通して音楽的な全てのものを体全体で感じさせ、児童の中に鼓動感が育つよう、高学年においてはそれらが豊かな表現につながるよう教材を配列し、その指導方法を研究する。

2. 今年度の活動の重点

- ① 児童の発達段階、技能の実態などを考慮し、授業のねらいを的確におさえた選曲。
- ② 個々の児童に対応できるように、その能力差に応じて児童が意欲的に取り組める教材（副教材）の選定、及び充実とその指導方法の開発。
- ③ 自らみがき、獲得し、これを一人ひとりの感性、思考、判断、試行、表現の体系に組み込まれるよう、教材配列の見直し。
- ④ 学校行事〈演奏発表、聖徳祭など〉における各学年に適した内容の研究（選曲、編曲、作曲）、また、入学式や卒業式などでの子どもによる演奏の検討。
- ⑤ 学級担任が学級経営に「音楽」が生かせるよう、教材、教具の一層の充実を図る。
- ⑥ 外部講師、演奏家等を招いての「特別授業」の実施検討。
- ⑦ 東初協音楽祭に「音楽特別研究」が参加予定。

美術科研究部の活動計画

1. 目的

- (1) 各学年の発達段階に応じた課題やテーマを設定し、のびやかな感受性と豊かな創造力が獲得できるように教材を工夫していく。
- (2) 個々の児童の個性が作品に反映し、よりの確な表現で仕上げられるように個別指導を確立していく。

2. 今年度の重点項目

- (1) 個性と能力に応じた、効果的な指導を工夫、開発していく。
- (2) 美術に対して興味を湧くような教材及び指導方法を追究していく。
- (3) 落ち着いた雰囲気の中で、児童が表現に取り組めるように、授業の展開を工夫していく。
- (4) 仕上げた作品に対して、自己評価の時間を確保していく。
- (5) 校内の作品展示に接することにより、児童の美術に対する関心や興味が向上し、鑑賞の能力が養われるようにする。

3. 研究課題

- (1) カリキュラムについて
絵画表現、彫刻表現、デザイン、工作の関連性とバランスの配慮及び一貫性を持たせたテーマの展開方法を開発していく。
- (2) 各学年・クラスの実態に見合ったテーマや教材を開発していく。
- (3) 学内展示の充実。児童の作品だけでなく、古今東西の美術作品も鑑賞ができるように展示方法を改善していく。
- (4) 東京私立小学校児童作品展への参加については、本校児童の特色が表せるテーマを追求していく。

家庭科研究部の活動計画

小学校の家庭科においては、実践的・体験的な活動や問題解決的な学習を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身につけることや、自分の成長を自覚し、家庭生活を大切にする心情を育むこと、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する能力と態度を育てることをねらいとしています。

本校では、5・6年生の子ども達の発達段階と生活状況を踏まえ、一人ひとりの実態に留意しながら、様々な活動に取り組んでいます。その活動をする中で、特に裁縫などの実習では子ども達一人ひとりの豊かな創造力を発揮できるよう、個々に工夫できる面を作り、指導を心がけています。

1. 目標

- ① 生活を工夫する楽しさや物を作る喜びを知る。
- ② 家族の一員としての自覚を持った生活を実感する。
- ③ 自分の成長を理解し、家庭生活を大切にする心情を育む。

2. 今年度の活動方針および重点

- ① 一人ひとりの児童が意欲的に取り組み、自分の家庭生活をより充実したものにできる力を育てる。
- ② 生活を工夫する楽しさや物を作る喜びを知るために、出来る限り実技の時間を保障していく。
- ③ 基本的な技術は指導するが、工夫できる面は大いに個々の考えを尊重していく。
- ④ 『個』だけでなく、自分と共に生活する家族にも目を向け、『家族』という集団の大切さを意識させる。

研究発表会の歩み

研究発表会の歩み

□ 第1回 (1969年)

主 題：学校における英才教育

記念講演 「学校における英才教育」	英才教育研究所長	伏 見 猛 彌
○研究発表 「国語教育について」	玉川大学 教授	上 原 輝 男
「数学教育について」	早稲田大学 教授	岩 崎 馨
「知能訓練について」	英才教育研究所	清 水 驍

□ 第2回 (1970年)

主 題：学校における英才教育

○記念講演 「英才教育5年間の経過と問題点」	英才教育研究所長	伏 見 猛 彌
○研究発表 「知能と学力との接点」	英才教育研究所 指 導 部 長	清 水 驍
「英研式知能検査法について」	英才教育研究所員	千 葉 晃

□ 第3回 (1971年)

主 題：学校における英才教育

○記念講演 「学校における英才教育の問題点」	英才教育研究所長	伏 見 猛 彌
○研究発表 「知能と学力との接点」	英才教育研究所 指 導 部 長	清 水 驍
「知能検査の問題点」	英才教育研究所員	千 葉 晃

□ 第4回 (1972年)

主 題：小学校における知能教育

○記念講演 「小学生の知能とその教育」	英才教育研究所 所 長 代 行	清 水 驍
○研究発表 「知能診断と教育評価の関連」	英才教育研究所 研 究 部 長	千 葉 晃
○研究発表 「教科の教育と知能教育との接点」	本校教務主任	園 田 達 彦
○研究発表 「知能教育のための教材」	本校教諭	小 林 五 郎
	本校教諭	郡 司 英 幸
	本校教諭	成 田 幸 夫

□ 第5回 (1973年)

主 題：知能と学力

○記念講演 「本校における教育」	英才教育研究所 所 長 代 行	清 水 驍
------------------	--------------------	-------

○研究発表 「知能と学力との接点(1)」 — 知能指数と学業成績を中心にして —

	本校教務主任	園田達彦
「本校における漢字指導」	本校教諭	小林五郎

□ 第6回 (1974年)

主 題：英才教育の追究 — 6年間の実践と問題点 —

○研究発表 — 各教科の実践をもとにして —

「数学科教材に対する児童の取り組み方」	本校教務主任	園田達彦
「歴史教育の方法と実践」	本校教諭	大竹良造
「思考の教材をどのように扱うか」	〃	草野修三
「空気の重さを中心にして」	〃	成田幸夫

□ 第7回 (1975年)

主 題：英才教育の追究 — 知能と学力 —

○記念講演 「現代学校と英才教育」	東京学芸大 学名誉教授	大嶋三男 先生
-------------------	----------------	---------

○研究発表 「知能と学力との接点(2)」 — 知能構造と学業成績を中心にして —

	本校主事	園田達彦
○分科会研究発表		
国語科 「英才児に於ける感情発達の過程」	本校教諭	草野修三
数学科 「知能因子からみた教材構造」	〃	吉井昇
理科 「理科工作教材を考える」	〃	成田幸夫
地理科 「地図と地球儀に対する児童の認識度」	〃	郡司英幸

□ 第8回 (1976年)

主 題：英才教育の追究 — 高知能児に応じた学習指導 —

○記念講演 「日本教育の課題」	国立教育研究所長	平塚益徳 先生
-----------------	----------	---------

○研究発表 「知能と行動」	本校校務主任	小林五郎
---------------	--------	------

○分科会研究発表

国語科 「文章理解の方法」 — 子どもの目に捉えられている場面映像はどのようなものか —	本校教諭	葛西琢也
数学科 「数学における英才児の特性」	本校主事	園田達彦
理科 「本校の子どもの理科に関する思考の特性」	本校教諭	成田幸夫

歴 史 「本校歴史科の授業展開」 — 因子別にみた知能の発達段階と

歴史科三段階の目標との関連 —
本 校 教 諭 大 竹 良 造

□ 第 9 回 (1977年)

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導 —

○記念講演 「英才教育について」 — 大脳生理学の立場から —

東 京 教 育 大 学
名 誉 教 授 杉 靖 三 郎 先 生

○分科会研究発表

知能教育「知能教育の必要性」 — 知能の発達過程を中心にして —

本 校 主 事 園 田 達 彦

国語科「知能と読みの接点」

本 校 校 務 主 任 小 林 五 郎

数学科「数学における英才児の特性とその指導法」

本 校 教 諭 吉 井 昇

理 科「科学的な思考方法と知能因子と学習課題との関連」

本 校 教 諭 成 田 幸 夫

地理科「地理科における知能因子と学習課題との関連」

本 校 教 務 主 任 郡 司 英 幸

□ 第10回 (1978年)

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導(2) —

○記念講演 「学校教育の現状と課題」 — 創造性豊かな子どもを育てるために —

筑 波 大 学 教 授 村 松 剛 先 生

○分科会研究発表

幼稚園教育「自主性を育てる遊び」

園 長 和 田 知 雄

知能教育「子どもの知能を伸ばすには」 — 意欲と集中力の育成と家庭の役割 —

本 校 主 事 園 田 達 彦

教科教育「知能開発（活用）をめざした学習指導」

本 校 校 務 主 任 小 林 五 郎

特別研究「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

本 校 教 務 主 任 郡 司 英 幸

□ 第11回 (1979年)

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導(3) —

○記念講演 「生涯教育と学校」

元 文 部 大 臣 永 井 道 雄 先 生

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼児教育」

知能教育「本園における知能教育」

教科教育（低学年）「知能開発をめざした学習指導」

教科教育（高学年）「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第12回（1980年）

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導(4) —

○記念講演 「これからの教育はどうあるべきか」

文部省教科調査官 渡辺富美雄先生

○研究発表 「卒業生の状況」— 追跡とその状況の分析 —

本校主事 園田達彦

□ 第13回（1981年）

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした

学習指導(5) —

○記念講演 「未来をみつめての教育」— 子どもの可能性を育てる教育 —

武蔵野音楽大学教授 大竹 武三先生

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼児教育」

知能教育「本園における知能教育」

教科教育（低学年）「知能開発をめざした学習指導」

教科教育（高学年）「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第14回（1983年）

主 題：英才教育の追究 — 英才教育15周年並びに校舎落成記念 —

低学年：知能開発をめざした学習指導(6)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(1)

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

知能教育「本園における知能教育」

国語教育「本校における国語教育」

数学教育「本校における数学教育」

理科教育「本校における理科教育」

地理・歴史教育「本校における地理・歴史教育」

英語・体育教育「本校における英語・体育教育」

□ 第15回 (1984年)

主 題：英才教育の追究

低学年：知能開発をめざした学習指導(7)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(2)

○研究発表「子どものものの見方・考え方」— 国語の授業を通して —

本校校務主任 小林 五郎

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

低学年教育「知能開発をめざした学習指導」

高学年教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

中学校教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第16回 (1985年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(1)

低学年：知能開発をめざした学習指導(8)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(3)

○研究発表「個性に応じた歴史学習」— イメージから論理的思考へ —

歴史科主任 大竹 良造

○分科会研究テーマ

教育課程「聖徳学園の教育について」

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

低学年教育「知能開発をめざした学習指導」

高学年教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

中学校教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第17回 (1986年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(2)

低学年：知能開発をめざした学習指導(9)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(4)

○研究発表「知能開発をめざした学習指導」— 地理・数学の授業から —

教 務 主 任 郡 司 英 幸

○分科会研究テーマ

教育課程「聖徳学園の教育について」

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」
低学年教育「知能開発をめざした学習指導」
高学年教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」
中学校教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第18回 (1987年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(3)
低学年：知能開発をめざした学習指導(10)
高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(5)

○園児・児童・生徒発表

- ① 歌と合奏 幼稚園年長組 指導者 鎌田禮子, 松本阿佐子
- ② 英語劇 「The King's New Clothes (はだかの王様)」〈原作アンゼルスン〉
中学2年生 指導者 米屋清貴, 佐藤久美子, 伊神直彦
- ③ 歌 唱 「山の歌」(夏の山, 山のこもりうた, 山のスケッチ, フニクリフニクラ)
- ④ 児童劇 「ほくたちの……ポチ」〈原作 梶本暁子〉
小学5年生 指導者 内藤茂, 仁科建司

□ 第19回 (1988年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育
低学年：知能開発をめざした学習指導
高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

- ① 歌 唱 4年生・指導者：林谷英治
- ② 聖徳学園における英才教育
 - 英才教育の基本方針 本 校 主 事 園 田 達 彦
 - 知能教育 本 校 教 務 主 任 郡 司 英 幸
 - 能力に応じた指導 本 校 校 務 主 任 小 林 五 郎
 - 個性に応じた指導 歴 史 科 主 任 大 竹 良 造

□ 第20回 (1989年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育
低学年：知能開発をめざした学習指導
高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

① 歌 唱 3, 5 年生・指導者：林谷英治, 関戸道成

② 児童劇 4 年生・指導者：板橋裕之

③ 研究発表「聖徳学園における英才教育」

小 松 賢 司 教諭

□ 第21回 (1990年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

低学年：知能開発をめざした学習指導

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

① 研究発表「聖徳学園における英才教育」

●知能開発をめざした学習指導

葛 西 琢 也 教諭

●一人ひとりの能力や個性に応じた指導

大 竹 良 造 教諭

② 児童劇 3 年生あずさ組「半日村」・指導者：松崎昭彦教諭・山本友子教諭

③ 歌 唱 4 年生・指導者：林谷英治教諭

□ 第22回 (1991年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

小学校：個性を生かす, その視点と方法を求めて

○全体会

① 講 演「聖徳学園の目指すもの」

— 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校の一貫教育について —

幼 稚 園 長 和 田 知 雄
小 学 校 長

② 歌 唱 4 年生・指導者：林谷英治教諭

③ 歌 唱 5 年生・指導者：関戸道成教諭

□ 第23回 (1992年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を助長する保育Ⅱ

小学校：個性を生かす, その視点と方法を求めてⅡ

○全体会

① 講 演「聖徳学園における幼稚園と, 小学校の教育」

— 幼稚園, 小学校の一貫教育について —

幼 稚 園 長 園 田 達 彦
小 学 校 長

- ② 研究発表「授業実践を通して『英才児』の個性を探る」

歴史科主任 内藤 茂

- ③ 歌唱 4年生・指導者：林谷英治教諭

□ 第24回 (1993年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて (I)

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて (III)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 研究発表「英才児の作文から，その個性を考える」

研究主任 葛西琢也
教務主任 草野修三

- ③ 歌唱 5年生・指導者：関戸道成教諭

□ 第25回 (1994年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて (II)

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて (IV)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 研究発表「英才児は地図をどう描くか — 子どもの空間認識と視点の転換 —」

地理科主任 松崎昭彦

- ③ 歌唱 5年生・指導者：関戸道成教諭

□ 第26回 (1995年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて (III)

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて (V)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践
— 自由研究・特別研究を中心に —」
特別研究科主任 大河内 浩 樹
- ③ 合唱 4年生・指導者：林谷英治教諭

□ 第27回 (1996年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：こどもの知能の発達を助長する遊びを求めて (IV)

小学校：英才児の創造性の開発と育成 (I)

○全体会

- ① 合唱 4年生・指導者：林谷英治教諭
- ② 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」
幼稚園長 園田 達彦
小学校長
- ③ 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践」
工作科主任 加賀 光悦

□ 第29回 (1997年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (VI)

小学校：創造的知能の開発と育成 (II)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」
幼稚園長 園田 達彦
小学校長
- ② 研究発表「創造性と学習 — 数字の実践から —」
数学科主任 松浦 博和

□ 第30回 (1998年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (VII)

小学校：創造的知能の開発と育成 (III)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」
幼稚園長 園田 達彦
小学校長
- ② 研究発表「卒業生のその後」
教務主任 草野 修三

□ 第31回 (1999年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (Ⅷ)

小学校：創造的知能の開発と育成 (Ⅳ)

○全体会

① 講 演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼 稚 園 長 園 田 達 彦
小 学 校 長

② 研究発表「聖徳の英語教育」

英 語 科 主 任 藤 石 勝 巳

□ 第32回 (2000年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (Ⅸ)

小学校：創造的知能の開発と育成 (Ⅴ)

○全体会

① 講 演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼 稚 園 長 園 田 達 彦
小 学 校 長

② 研究発表「歴史における概念形成のための想像力の育成」

歴 史 科 副 主 任 板 橋 裕 之

□ 第33回 (2001年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (Ⅹ)

小学校：創造的知能の開発と育成 (Ⅵ)

○全体会

① 講 演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼 稚 園 長 園 田 達 彦
小 学 校 長

② 研究発表「創造的知能の開発と育成 — 知能訓練の実践から —」

知 能 訓 練 科 主 任 富 永 理 香 子

□ 第34回 (2002年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に対応した複数指導 (担任) 制 (Ⅰ)

小学校：創造的知能の開発と育成 (Ⅶ)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 研究発表「聖徳学園小学校の理科教育」

理科主任 三輪広明

□ 第35回 (2003年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に対応した複数指導（担任）制（Ⅱ）

小学校：創造的知能の開発と育成（Ⅷ）

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 「創造的知能の開発と育成」— コンクール作品(作文)にみる聖徳児童の創造性—

国語科 内藤 茂

□ 第36回 (2004年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（Ⅲ）

小学校：創造的知能の開発と育成（Ⅸ）

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

小学校長 園田達彦
幼稚園長

- ② 「聖徳における二人指導制」— 一人ひとりの個性と能力に応じた指導の追究—

教 頭 加賀光悦

□ 第37回 (2005年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（Ⅳ）

小学校：創造的知能の開発と育成（Ⅹ）

○全体会

- ① 講演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長 園田達彦
幼稚園長

- ② 数学・個性的な解法— オープンエンドアプローチを通して—

数学科主任 齊藤 勇

□ 第38回 (2006年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（V）

小学校：創造的知能の開発と育成（XI）

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 園 田 達 彦
幼 稚 園 長

② 学習発表「詩のボクシングの実践」— 英才児の個性・創造性育成の場として —

6 年 生 児 童 科 渡 辺 泰 介
国 語

□ 第39回 (2007年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（VI）

小学校：創造的知能の開発と育成（XII）

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 園 田 達 彦
幼 稚 園 長

② 創造的知能の開発と育成研究 — 発明くふう展にみる聖徳児童の創造性 —

研 究 主 任 松 浦 博 和

□ 第40回 (2008年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（XIII）

個性と能力差に応じた複数指導（VII）

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 郡 司 英 幸
幼 稚 園 長

② 知の冒険心を育む学校図書館

司 書 教 諭 江 橋 真 弓

□ 第41回 (2009年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (XIV)

個性と能力差に応じた複数指導 (Ⅷ)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 郡 司 英 幸
幼 稚 園

② 聖徳の理科教育について

理 科 主 任 米 持 勇

□ 第42回 (2010年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (XV)

個性と能力差に応じた複数指導 (IX)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦
幼 稚 園

② 聖徳の修学旅行

～子ども達が成長する5泊6日～

地 理 科 主 任 松 崎 昭 彦

□ 第43回 (2011年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (XVI)

個性と能力差に応じた複数指導 (X)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦
幼 稚 園

② 創造的知能の育成

～幼稚園の知能あそびから小学校の授業へ～

知 能 訓 練 科 砂 廣 芳 子

□ 第44回(2012年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (XVII)

個性と能力差に応じた複数指導 (XI)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦
幼 稚 園 長

② 創造的知能の育成 ～豊かな視点を育てる(数学・地理の授業実践から)～
(幼稚園の知能あそびから小学校の授業へ)

数学科主任 細 沼 克 吉

研 究 同 人

(平成25年度)

[理事長]

長 尾 央

[聖徳幼稚園]

園 長 加 賀 光 悦

教 頭 松 浦 博 和

主 任 飯 濱 久美子

副 主 任 永 坂 圭 子

生活指導主任 岩 瀬 勝 彦

年 少 担 任 久 保 千 春 (知能あそび・体育あそび)

〃 磯 沼 美 紀 (リトミックあそび・造形あそび)

〃 荒 井 明 子 (リトミックあそび・造形あそび)

〃 大 下 真由美 (知能あそび・体育あそび)

年 中 担 任 永 坂 圭 子 (造形あそび・リトミックあそび)

〃 神 山 祐 希 (リトミックあそび・造形あそび)

〃 渡 辺 由美子 (体育あそび・知能あそび)

年 長 担 任 飯 濱 久美子 (体育あそび・知能あそび)

〃 園 山 恵理子 (造形あそび・リトミックあそび)

〃 高 井 正 恵 (リトミックあそび・造形あそび)

専 科

教 諭 佐 藤 憲 夫 (体育あそび)

講 師

〃 粕加屋 恵 子 (知能あそび)

〃 大 嶋 比查子 (知能あそび)

〃 松 浦 雅 美 (知能あそび)

〃 上ノ宮 純 子 (延長保育)

〃 大 槻 妙 子 (延長保育)

〃 佐久間 由 紀 (延長保育)

[聖徳学園小学校]

校 長 加 賀 光 悦

教 頭 松 浦 博 和

教 頭 和 田 知 之

教 務 主 任 粕加屋 直 幸

研 究 主 任 大河内 浩 樹

生活指導主任 齋 藤 勇

低学年主任 由 里 敏 夫

高学年主任 板 橋 裕 之

担 任

はまかぜ組 (1年生)	渡 辺 泰 介 (国語・英語・ゲーム・工作・美術)
〃	佐 藤 憲 夫 (体育)
わかしお組 (1年生)	渡 邊 孝 典 (数学・知能訓練・美術)
〃	千 葉 安 弥子 (数学・家庭)
あずさ組 (2年生)	内 藤 茂 (国語・歴史)
〃	谷 口 優 (数学・知能訓練)
やくも組 (2年生)	由 里 敏 夫 (国語・歴史)
〃	木 村 美 樹 (数学・体育)
つばさ組 (3年生)	大河内 浩 樹 (理科)
みずほ組 (3年生)	明 石 この実 (国語・英語)
3年学年担任	藤 石 勝 巳 (英語・知能訓練)
あさぎり組 (4年生)	細 沼 克 吉 (数学・地理)
しらさぎ組 (4年生)	川 口 涼 子 (国語・知能訓練・家庭)
4年学年担任	板 橋 裕 之 (国語・歴史・体育)
あさま組 (5年生)	三 輪 広 明 (理科・数学)
ほくと組 (5年生)	松 崎 昭 彦 (数学・地理)
5年学年担任	古 賀 有 史 (数学・英語・音楽)
あけぼの組 (6年生)	齊 藤 勇 (数学・地理・家庭)
はくたか組 (6年生)	米 持 勇 (理科・数学)
6年学年担任	中 野 恵 子 (数学・知能訓練)

専 科

教 諭	高 橋 まり子 (知能訓練・ゲーム・工作)
〃	豊 田 奈都代 (知能訓練)
〃	富 永 理香子 (知能訓練・国語)
〃	横 野 真 弓 (知能訓練・ゲーム・工作)
〃	地 挽 裕 子 (知能訓練)
〃	松 尾 由 香 (知能訓練)
〃	砂 廣 芳 子 (知能訓練)
〃	浅 利 絵 海 (知能訓練・ゲーム・工作)
〃	三 品 亜 美 (音楽)
〃	白 田 恵 実 (知能訓練)

司書教諭	江 橋 真 弓
養護教諭	吉 村 厚 子 (保健)

講 師	草 野 修 三 (国語・地理)
〃	林 谷 英 治 (音楽)
〃	藤 原 陽 子 (英語)
〃	大 嶋 比 查 子 (知能訓練)
〃	粕加屋 恵 子 (知能訓練)
〃	松 村 英 恵 (美術)
〃	内 藤 晴 美 (知能訓練)
〃	山 田 桂 子 (知能訓練)
〃	アダム・イスフェンディヤー (英語)
〃	須 藤 泰 規 (美術)
テ ス タ ー	山 田 多 津 子 (知能検査)
〃	佐 藤 智 子 (知能検査)
事 務 次 長	道 旗 えり子
事 務	萩 原 夏 美 (庶務・経理)
〃	澁 谷 香 耶 (庶務・経理)
環 境 美 化	岩 瀬 勝 彦
〃	小 池 きみ江

第 45 回 公開研究発表会要項

発 行 日 平成 25 年 6 月 15 日
編集企画委員 松 浦 博 和
飯 濱 久美子
豊 田 奈都代
発 行 者 加 賀 光 悦
発 行 所 聖 徳 学 園
東京都武蔵野市境南町 2-11-8
TEL (0 4 2 2) 3 1 - 3 8 3 9
印 刷 所 株式会社 文 伸

